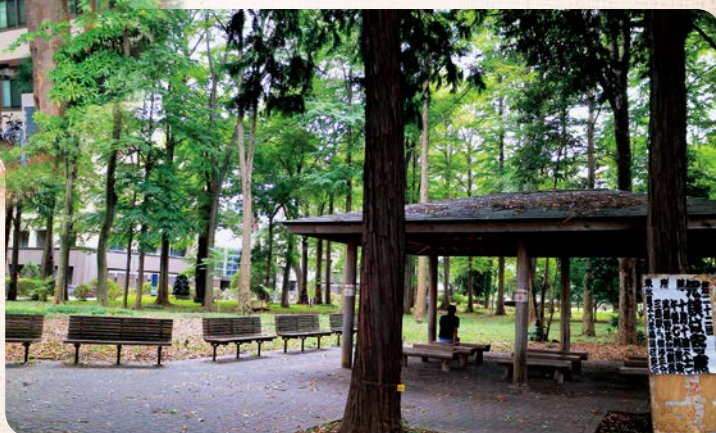


NO.90

2016. 1

農工通信

The Graduates' Association of
Tokyo University of Agriculture and Technology



東京農工大学同窓会
<http://www.tuat-dousoukai.org/>

TAT

農工通信 NO.90

目次

I 思い出に耽る

I - 1. 仕事人生活

1. 五感不満足と会社勤め	比留間藤郎	織工S38	1
2. 「教員なんかになるのか…」と言われながら	倉橋 政道	農化S41	1
3. 我が人生の彷徨	小川 建	林 S44	2
4. いろ、イロ人生	藤原 稔	工化S44	3
5. BOEING社での思い出	須田 彰久	応物S46	4
6. 海外で活躍してきた同窓の方々との思い出	福士 淳治	林 S46	5
7. 所感	西村 寿	農工S50	6
8. 蚕糸業に思う	藤井 昇	蚕糸S51	7
9. 「731915」	佐藤 廣厚	環保S52	8
10. 私の社会人人生	伊沢 英世	電気S59	9

I - 2. 学生生活

1. 人間形成となった忘れ得ぬ人と仲間達 — 剣道部の思い出 —	生沼 俊夫	養蚕S35	9
2. 半世紀前の奈良にて	太田 道明	農工S42	10
3. 樺並木の向こうにあった楽園	田淵 寿一	農 S47	11
4. 東京農工大学農学部本館および東京大学教養学部 101号館の建築様式と農学部の変遷	池田 和弘	林 S61	12
5. 農工大、私の原点	石坂 貴秀	機シス院H16	13
6. 外食のすすめ	関口 拓史	生命院H24	14

II 絆を深める

1. クラス会60年の歩み	藤本 吉幸	林 S30	16
2. 55年間続くクラス会と文集発行	馬場 信行	林 S35	16
3. 卒業後50年目のクラス会～母校訪問	小熊 和政	機械S39	17
4. 入学後48年、農業生産工学科クラス会	大亀 哲郎	農工S46	18
5. 大野研同窓会は、「正月の集い」が原点	橘川 達史	工化院S49	18
6. 農工大OB会のありがたさ	山口 知幸	農院H6	19

III 手応えを感じる

1. ヤンマーミュージアム見学記 訪問記	川島 長治	農 S39	21
2. 次代につなぐ「からきだの道」	近藤 眞澄	化工S48	22
3. めざましい女性の進出にエール！	田畑 正紀	林 S55	23
4. 勉強するのは今からでも遅くない	名知 宣博	林 S61	23
5. これは運命か！？農工大での分かれ道	岩佐 秀明	高工H1	24
6. 和牛は日本の風土のたまもの	傍島 英雄	農 H4	25
7. 報道パイロット	中村 知博	電情H9	25
8. 私と日本酒	和田 茂樹	連農H14	26
9. 白山麓で地域と野生動物問題に向き合いたい	有本 勲	連農H24	27

IV 学びを極める

1. 研究・開発に携わる皆さんへ	吉田 茂昭	織化S35	29
2. (目標達成) - (現状) = (努力)??	杉浦 猛雄	織化S38	29
3. 安全作業とわが人生	上野 徳也	農工S39	30
4. 人工降雨と黄砂・口蹄疫の研究推進	真木 太一	農 S41	31
5. 拙著「日本の戦略的思考—歴史から学ぶその ミクロ性とマクロ性」 「創造への序章」について	石川 泰弘	製糸S41	32
6. 「日本語の科学が世界を変える」 松尾義之著を読んで	石渡 荘介	化工S48	33
7. 21世紀は「農」の時代(その1)	横本 正樹	農 S48	34
8. 営業力強化に向けて思うこと	大西 孝明	応物S54	35
9. 農・工の両輪をもっと活用しよう	若月 満	化工S54	36

V 趣味に拘る

1. 農作業のサイクル	東 功	織工S38	38
2. 「森の生活」顛末記	池田 典昭	林 S49	38
3. 造園技能が面白い	古川 勝也	林 S50	39
4. リスト・マニア	東野 正	林産S50	40

VI 広く伝える

1. 「絹の歴史」と篤学の大先輩	酒井 英卿	養蚕S33	42
2. 水研会ー水谷研究室関係者の集い	杵村 義昭	織化S34	42
3. 数奇な運命をたどった留学生お二人のこと	高畑 滋	農 S34	44
4. 中国政府 友誼賞受賞	田村 誠一	織工S45	45
5. 農工大グローバル・コミュニケーション 集団部会発足!	釣屋 政弘	生機S54	45
6. 安藤哲教授の退官記念パーティー	渡邊 快記	生シ院H19	46
7. MOT部会活動のご紹介	加藤 美治	MOT H21	47

VII コラム<復興>

1. 福島県に応援職員として出向した1年を振り返って	園田敬太郎	農 S61	15
2. 原子力発電所事故後の環境回復に関わる活動	眞田 幸尚	環・資院H12	20

VIII コラム<海外>

1. 農工大とLampung大学との交流の発展を! Bainah sari dewi (インドネシア)		連農H21	28
2. MEMORIES WITH TUAT Dang Quoc Dung (ベトナム)		連農H21	37
3. First Impression in Japan Vu Thuc Linh (ベトナム)		国際院H21	41
4. Japan Impress on my mind Integrated agricultural development towards natural sustainable way and cultural value conservation for the future Dinh Van Dao (ベトナム)		国際院H22	47

IX キャンパス便り <農工大の今>

第1回 「向友会」	49
-----------	----

広告	50
事務局だより	51

表紙写真のことは

深水智明(織工S38)
峰松敏夫(農S47)

何年ぶりかで母校に足を踏み入れる。どこか懐かしさを感じる大学構内の風景。安らぎのひと時を与えてくれる。「農工通信」の中でも、『思い出すのは農場のある大学』(第88号)をはじめ、忘れられないキャンパスへの思いがこれまで数多く綴られてきました。そこで今回は、ほんの3景ですが、まず農学部のある府中キャンパスを取り上げ、農場から眺める風景をメインに、学舎の一部と、すきや造りがある中庭を配置してみました。

学科・専攻略記表

略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
農	農学科	織工	繊維工学科	環・資院	環境・資源学専攻
養蚕	養蚕学科	化工	化学工学科	国際院	国際環境農学専攻
蚕糸	蚕糸生物学科	織化	繊維化学科	工化院	工業化学専攻
農化	農芸化学科	工化	工業化学科	機シス院	機械システム工学専攻
林産	林産学科	機械	機械工学科	生命院	生命工学専攻
環保	環境保護学科	生機	生産機械工学科	MOT	技術リスクマネジメント専攻
林	林学科	電気	電気工学科	連農	(博士) 連合農学研究科
農工	農業土木学科 農業生産工学科	応物	応用物理学科	生シ院	(博士) 生物システム応用科学後期
製糸	製糸学科	電情	電子情報工学科		
高工	高分子工学科	農院	農学専攻		

I. 思い出に耽る

I-1 仕事人生活

1. 五感不満足と会社勤め

比留間藤郎 (織工 S38)

会社勤めで半世紀が過ぎ、現在も馬鹿の一つ覚えで昭和38年に入社した帝国繊維(株)に勤務し、ご多分に漏れず繊維産業の栄枯盛衰を味会い人生も終盤になりました。繊維産業とは言うものの特殊部落である麻繊維を栽培から製線・紡績・製品化する企業でありました。入社時には亜麻製線15か工場、製品工場(原料加工・紡績・製織等)6か工場、東京に本社・研究所、支店は大阪と札幌といった陣容で一端の繊維会社であり、麻事業をメインとした企業でありました。昭和25年にはGHQにより、「過度経済力集中排除法」にて繊維会社では唯一3社分割される憂き目にあった会社でもあります。

農工大学工学部繊維工学科(前号で同窓生が学科改革等に書かれて居られる)を卒業し、企業人として会社に何の貢献も出来ず今日まで無為徒食してきたのか考えさせられるものである。唯云えるのは我々が社会に出た当時の繊維企業の多くが諸先輩の努力により先人の蓄えた資産・技術を有効に活用発展し、今日産業界に力強く生命力を持って多くの企業が存続されている事であります。話はチト大きくなったが小生、大学生活は多くの友に恵まれ4年間、府中と小金井で平凡に生活し、卒業させて頂き社会人に成ったというのが正直なところであります。

さて、小生の個人的な状態は表題にもしましたが、五感不満足といった状態で、平成18年に突発性難聴を発症し左耳が音の世界から退き、6年前には上下に義歯を入れざるを得なくなり、食感を十分に楽しみ味わう事が出来なくなり、更に昨年は両眼も白内障になり、1週間の入院で両目の濁りを取りレンズを入れた有様です。嗅覚の鼻は発症当時花粉症の走り、40年前からこの方、春麗のお花見気分には自然と体が拒否反応を示しています。触覚も官能検査の手の皮が厚くなり機能を失ってい

る状態で五感が全て不満足の状態であります。

企業人としては繊維産業の栄枯盛衰・会社の方針に従い、時代に沿って多くの繊維関係商材の開発・生産管理に否応なく携わり今日まで過ごしてまいりました。主なものは化合織・麻混紡績、亜麻紡績(温湯漕に潜らして糸にする)、テキスチャードヤーン(加工糸)、インフレーションフィルム開織糸(畳の縫い糸)、紡績用麻繊維原料加工(精練・晒白製線処理)、消防ホース(筒状織物にゴム・樹脂を内張り)等など繊維に関係する7商材に携わって来ました。これも繊維企業として従来素材・商材を基に、関連業種に手を広げ、従来商材の素材を変更し品質、性能、コストを時代に合わせ製品を生み出すことであります。一時は中国、香港、台湾、韓国、タイ、インドネシア、フィリピン等に原材料、コストダウンを求め廻ったこともありましたが、現在は能力・体力的に不満足で消防ホースを中心とした送水ホースと麻絡みの製品にかかわっています。

さて、企業人になり、52年の多難な過程で、少なくとも若き夢を持ち体系的な学問有無と生意気にも言いつつ学んで卒業した大学生生活が大きく影響を与え、新しく直面した諸事象・課題に対し、基礎対処・応用対応の諸施策が結果として育まれたものと感謝しております。

ここらで農工大学の益々の発展を祈念し駄文を終わります。

2. 「教員なんかになるのか…」と 言われながら

倉橋 政道 (農化 S41)

将来、化学技術者を夢見て入学したが、2年生の頃、東京学芸大に行って子どもと遊ぶサークルに入って、荒川区で活動。自分が意外にも子ども好きなことが分かった。教育実習中に、“教え育てること”に意義を感じ、4年生になった春、教員になる旨、所属研究室の主任教授に言ったところ、「教員なんかになるのか…」と言われた。「生徒との関わ

りの中で、生きがいを見出したい」と言って、夏の教員採用試験に。ところが東京都の高校化学教員は実施されず、隣の埼玉県の採用試験を受けて合格。昭和41年4月、県立戸田高校の化学担当教諭に。当時の校長には、「生まれ育った東京に3年以内に戻ります」と、不遜な発言。ところが、素朴で純真な生徒達に感動。化学嫌いの生徒を出さない授業を心掛け、年中、実験を実施。また、学生時代に取得したアマチュア無線の資格を生かして、部活動を新設して担当。結局、東京に移らずに8年間勤務の後、高校生急増期に新設された県立川口北高校へ転勤。分かりやすい授業を心掛け、NHKの化学テレビ番組も導入。新任の先生方がよく授業を見学に来ていた。

30代後半、県立教育センターでの化学の実験講習会を毎年受講。そのうち、準備等を手伝われ、企画も依頼され、「企画・運営に携わるにはどうしたら良いか」を聞いた。「教頭試験を受ければ良い」とのことで、受験して合格。ところが、昭和61年4月の転勤先は、県教育局の教員人事担当の高校教育課管理主事。希望した実験の企画・運営は実現せず。

その後、県立越谷北高校教頭、高校教育課課長補佐、県立和光高校校長、主席指導主事、課長などを経て、平成8年、大規模校の県立伊奈学園総合高校（生徒3,240名、教員221名、教頭6名）校長に。毎年、80数名来る教育実習生の授業を見て廻ってコメント。平成12年、創立105年目で男子校の県立浦和高校校長に。宇宙飛行士の若田光一氏（昭和57年3月卒業）が、10月に第2回のフライト。1月に校内で帰還報告会を実施（新聞記事参照）。その年の3月、英国の姉妹校であるパブリックスクールへ行って、

長期交換留学に調印。その後、毎年、生徒が同校へ留学して、卒業後はロンドン大学、ケンブリッジ大学等へ進学する生徒も。

定年後の平成15年4月から70歳まで、芝浦工大で特任教授・講師として、理科指導法・職業指導などの授業を担当。化学の授業を自らやって見せ、各学生の模擬授業では、ビデオに撮ってDVDにして渡し、かつ、学生相互に良い点・改善点を上げさせて討論。教育実習先の教員から、「授業が上手い」と言われた学生も。

以上のように、様々な形で生徒・卒業生・学生、先生方と関わって“教え育てること”に全力投球してきた。「座右の銘は？」と聞かれると、“磨穿鉄硯”と答えている。教員となっている同窓の方々に少しでも参考になれば幸いである。このような機会を作って下さった小峯 賢氏（林S35）に心から感謝申し上げます。

3. 我が人生の彷徨

小川 建（林S44）

我々昭和44年（1969年）学部卒の者は、今年、無事「古稀」を迎える事になった。

「自然」が好きで農学部に入學した私は、学部2年生の夏休みに、ある青少年団体が主催の当時は珍しかった「森と湖の国、フィンランド」を訪問する学生交流事業で、欧州7か国を約1か月間かけて訪問する機会に恵まれた。この交流でヨーロッパの人々が暮らす都市や農村、さらに彼等の生活環境を目の当りにし、当時20歳であった私にとっては、街並等のデザインの素晴らしさに「カルチャーショック」を受けて帰国し、その事は我が人生の針路を左右する大きな出来事となった。

卒業後は、海外留学の機会のある東京都庁建設局公園緑地部に奉職し、公園等の計画・設計・管理の仕事に就いたが、夢となっていた欧州留学を実現すべく都庁を退職し、ベルギー政府招聘留学生として、ブラッセル大学都市計画学科に入學した。今度はヨーロッパの人々の生活自体に「カルチャーショック」を受ける事になる。

帰国後は、これ等の生活環境のデザインの勉強を続けたく都庁を退職し、米国ペンシルヴェニア大学院環境デザイン学科に留学し、修士号を取得する事



が出来た。その後は、友人と環境デザインの計画・設計の事務所を開設し、人々の生活の舞台である「街空間」の計画や設計等の仕事を行ってきた。

バブル当時は、役所からの「街造り」の計画・設計業務が、「安かろう、良かろう」との「競争入札方式」で発注されても何とか事務所の運営は維持できたが、バブルが弾けてからは、事務所の技術職員の育成や所属協会からの「談合破りは罪です」等という意味の分からぬ中傷等で行き詰まり、事務所閉鎖を余儀なくされ、下請けが主な仕事となった。

その後はこれまでの勉学の社会還元を目指し、身に付けた語学や国際感覚を生かし、日本の世界貢献を謳ったODA（政府国際援助）の下請け仕事で、アジア・アフリカ等の途上国での開発計画や各種施設建設等での「自然と調和した開発計画」が出来る事を願ってそれ等の協力を行ってきた。

しかしながら、そこで垣間見えたものは、例えば次の様な現象であった。

1990年頃に人口約40~50万の或る途上国における年間約10億円の無償援助事業で、「国造りは人造りから」とのコンセプトに基づき、数多くの小学校建設プロジェクトが約20年間に渡り行われ、その建設の基本計画から建設工事までに渡り携わる事となった。最初はその国の人達は外国人が珍しい為か、道で会っても笑顔で挨拶をしてくれ、また夏の暑い夜には満天の星の下釣りに誘ってくれたりしてとても友好的であった。その為、住民は皆楽しそうに静かで平穏な生活を楽しんでいる印象を受けていた。

しかしながら、多数の小学校建設の完成までの約四半世紀間に、世界各国からのインフラやIT技術等の援助で、狭い島々に下水道が完備し道路は舗装され、各戸にはTVやPCが行き渡り、世界中の情報を瞬時に覗く事が出来る様に成っていた。その御蔭で、彼等の生活環境が発展国と比較して、いかに貧困（不幸）であるかを目の当りにする事が出来る様になっていた。その結果、私が2012年頃に訪れた時には、携帯電話やラジカセを手にした若者が街中に屯し、綺麗に舗装された道路には輸入されたオートバイや自動車が氾濫し、狭い島中に騒音とCO₂をまき散らしていた。経済構造も観光客相手と現地住民用の二重市場経済が構築されており、あの過去の静かで平穏な雰囲気は見る影も無くなっていた。

これが「文化・文明」の発展と現代の（市場）経

済やその「申し子」なのかと、とても悲しく侘しい思いを受けた事が強く印象に残っている。

その他、アフガニスタンやパキスタン等のイスラム教国の地方や山奥に建設した多くの校舎では、来世を礼讃する「殉教」や「聖戦」を奨励する「コーラン」を教科書として授業が行われており、授業内容は「内政干渉」となるので規制出来ないとの事で、ただ黙々と荒廃してゆく自然環境を前に、契約書通りの建築工事の完成に汗を流す毎日であった。

この様に沢山の国々で色々な仕事に携わり、気が付いたら「古稀」を迎えていた。今後はベルギーの旧友と共に、文化や歴史の本を読みながら、楽しく老後の時間を享受しようと考えているところである。



アフリカのケニヤ国「ナクル湖自然公園」近隣のナイバシヤ湖畔の草原で、野生のキリンと遭遇した時

4. いろ、イロ人生

藤原 稔（工化 S44）

在学中は、櫛寮第1期寮委員を務め、卒業後、両親の急死により、笠岡市に帰り、結婚、就職し、老後を迎えています。福山市の広島化成に中途入社しましたが、シューズ事業部の生産地が、入社後まもなく韓国、台湾、中国、バングラディッシュ、ベトナム、と移転し、従業員数も2800人から400人強に減少しました。入社後は、工業用ゴム事業部で、ゴム床材、テニスコート、弾性舗装、点字タイル、糊摺りロールなどの製品開発をしました。いずれもカラー製品で、黒ゴム製品と異なり、原料顔料、充填剤、ゴムにより製品の色違いによるクレームに飛び回っていました。

点字タイルは、屋内用SBRゴムは耐候性が悪く、屋外用EPTゴムは、耐候性が良いが、屋内使用で初期に汚染が発生し、同一色なので、間違っで使用される場合のクレームがありました。当時、顔料カドミウムイエローの禁止で色調が変わり、ウエザメーターで、試験し大丈夫と判断しましたが、沖縄で脱色が起こり張り替えました。試験片の照射時間不足でした。台湾のサンプル施工で、3M社製のプライマーがシンナー含有で輸入通関できず、李登輝総統の親族にお願いし、やっと通関。施工完了。受注にはつながりませんでした。社会習慣の差でしょうかアメリカでも問題外と言われました。

弾性舗装で宮内庁の馬房前のサンプル施工、二重橋（石橋）の本施工で、当時問題になっていたエーテル系発泡ウレタン底材の加水分解との材料組成の違い、塗料変退色の説明に宮内庁に出頭しました。

この時、皇居勤労奉仕団の団体を初めてみました。数日間奉仕され、当時は、菊のご紋の入ったタバコをいただくとの事でした。馬房には、各種儀式用の馬車があり、4号車は新任の特命全権大使、公使が、東京駅（現在は、明治生命会館前）から2頭立て、前後を騎馬で守られ、信任状提出のため皇居に向かうのに使用しています。ケネディー駐日大使の報道でご存知と思います。絵に描いたようなパレードを観られます。



息子（右）と一緒に

子供が家を出て、夫婦2人の生活が25年、糖尿病になって30年、幸いにも余病は、発生していませんが、神経痛とは縁がきれません。地域のお世話をしている時に、転職後、職場でいじめに会い、精神病院を退院後、通院中のひきこもりの青年を私たち夫婦と当人の父親4人で、旧中学校のグラウンドを借りて、グラウンドゴルフを5年前から始めました。もうすぐ社会復帰出来ればよいと思っています。

2年前に、地区のグラウンドゴルフ会に、夫婦で入り、協会の3級指導員となり、週3回、練習と試合をしています。私達のように夫婦での参加者は少数派です。退職直前に畑が返還され、子供さんに会社を譲られた方々と協働で焼酎用さつまいもを4トン以上を目標に圃場整備をしましたが、彼の病気のため中止し、耕作放棄地としました。残った私有地で、体に負担をかけず、手抜きで、果樹、野菜、自家消費米を栽培しています。また、同級生の万浪会にできるだけ出席したいと思っています。

5. BOEING社での思い出

須田 彰久（応物 S46）

S46年富士重工業への入社内定後の配属先調査で、自動車の研究実験部門か航空のコンピュータ部門かという2つの選択肢があり、学生時代に自動車部でラリー漬けであった私は迷わず自動車の研究実験部門と回答した。しかし、配属結果は宇都宮航空のコンピュータ部門で一つの夢は消えていった。



当時のコンピュータ部門は黎明期で、社内の各部署から集められた人達の急造組織であった為、人・質共に不足し、本来複数で分担すべき作業を一人で負担せざるを得ない状況で、マシンオペレーション、システムデザイン、プログラミングをこなし、現在のような残業制限なく体力の続く限り仕事のできた懐かしい時代であり、個人の技量は短期間で高くなった。そんな時期に航空部門として自主開発の双発ビジネスジェット・FA-300【8人乗り】の開発が始まり、私は技術情報管理システム開発を短期間でまとめるよう指示を受けた。日程管理、図面管理、部品情報管理、重量重心管理、形態管理【部品のトレーサビリティ】を全て半年で稼働させるとい

う強行日程で、システム開発依頼者からの説明後すぐにドキュメントレス【プログラム仕様書無し】で100本超のプログラムを書き上げ、何とか期限に間に合わせる事ができたが、完成後の後始末（ドキュメント作成）に多大の時間を費やし苦勞した。同時に、この経験でシステムエンジニアとして自立できる自信が付き、転職を考えた時期でもあった。

29歳の時、BOEING社【以下B社】の767という中型旅客機【200人乗り】開発がスタート。日本の三菱重工、川崎重工、富士重工とイタリアのアエリタリアが全体の15%を受け持ち、設計から製造までの責任分担でプロジェクトへの参画が決まった。図面情報入力にB社が開発した専用の入力端末で行い、1日単位でデータ転送、翌日メンテナンスデータが日本各社に送り戻されるというリモート・ジョブ・エントリー方式であった。



端末システム導入とインターフェースシステム開発の為、各社が半年間B社でトレーニングを受けることになった。日本3社から各1名、アエリタリアから2名シアトルに赴くことになり、FA-300プロジェクトの実績から私がアサインされ、5名の共同研修がスタートした。三菱は設計技術者、川崎は設計管理者、富士はシステムエンジニアと出身部署がバラバラであったが、互いに得意分野が異なりチームとしては上手く機能していた。図面情報入力に関しては、日本チームが3ヶ月程でマスターしたのに対しイタリア2名は遅れていた。ある時、本国には帰りたくないという本心を打ち明けてくれ、奥さんと子供と一緒にアメリカ生活がとても楽しいということを知った。私は当時新婚で、研修3ヶ月後にシアトルに妻を呼び寄せ、実質の新婚生活を楽しんだ。

歯がゆい想いもした。インターフェースを作るための情報入手が各社共全く進まず、色々なルートでお願いしたが、研修範囲が決まっている君達に図面

システム以外の情報は不要、という態度で実現が困難であった。研修期間が残り2ヶ月の時、B社の767開発責任者がディナーに招待してくれた。「何か要望はないか」と聞かれ、「日本は設計情報管理システムとしてB社のシステムを導入するので、関連する下流のシステムとの繋がりを調べる事が大変重要である」ことを下手な英語で切切と訴えると、コンピュータ部門に連絡をつけてくれ、ギリギリのところで調査が一気に進み予定の6ヶ月で無事終了した。（イタリアチームは+3ヶ月）帰国後1年で各社でのシステムはB社立会いの下無事稼働し、日本チームの3名はB社から特別表彰（ π ）を授与された。

767開発が完了して10数年後、777【350人乗り】の開発プロジェクトがスタートした。その時の責任者も、767開発時代にこちらの提案を一切受け容れなかった相手だった。チームを代表して私が提案を行った。こちらの提案が予想に反して全て受け容れられた事に驚き、理由を問うと、「767では君達の実力は未知数で判断材料がない為提案は受け容れる事ができなかったが、767では計画通り完全に実行したので、B社は日本チームを信頼している」とのコメントであった。

777はB社史上で最高の製造機数を誇り、現在も売れ続けているベストセラー機になっている。空港で767・777を見る度に、共に頑張った人たちの顔が思い浮かぶ。

6. 海外で活躍してきた同窓の方々と の思い出

福士 淳治 (林 S46)

1966年（昭和41年）春、農学部正門から本館まで通ずるケヤキ並木は、まだ青年の勢いで、堂々と、屹立していました。熊本から出てきた私は、林学科に入ったものの当面の目標を全く持てない自分自身を持って余している学生でした。それでも、林政学研究室に入ってからは野々村豊先生、山岸清隆さんのご指導を受け、学部生として林業経済学会（関東大会）での発表を経験し、社会に出ることができました。

1971年、本州製紙（後に新王子製紙と合併し王子製紙）に入社し、主に製紙原料、特に海外から

の木質原料調達に長く携わりました。日本の製紙産業は、当時（1970年）一人当りの紙消費量が121kgでしたが、2000年には249kgまで増加します。国内の木質原料調達には限界があり、古紙の利用率も現在のほぼ100%古紙で段ボール原紙が生産できるのとは違う、木質原料中心の時代でした。日本の製紙各社は主に米国西海岸シアトルに拠点を置き、北はアラスカ州、BC州（カナダ）、ワシントン、オレゴン、カリフォルニア各州の積出港から日本の製紙工場向けに製材廃材や虫害木をウッドチップにして、大きな専用船で運んでいました。

私は20代後半から途中4年間の本社勤務を経て、都合7年半シアトルに駐在し、北米西海岸を文字通り、飛び回りました。今回、この農工通信への寄稿を薦められた畠山晃（林・S40）さんは研究室の先輩であり、かつ、その時期シアトルで同業他社（王子製紙）の駐在員でもあり、家族共々お世話になりました。江戸っ子気質で歯切れがよく、その愛される人柄はまさに海外向きで、その後植林事業を担当するベトナムでもいかに発揮されたと、伺っています。この頃から、同窓生との交わりは、同じ社内だけでなく同業他社或は、それ以外にもおよび、2010年会社を退職するまで、要所、要所で私は支えられてきました。三宅欣寿（林・S15）さんはアラスカパルプの駐在員として、当時、北米西海岸最大のチップ輸出港クースベイ（オレゴン州）におられ、新米の私は北米西海岸の木材産業事情について、時折丁寧な教えてもらいました。三宅さんは引退後もシアトル近郊の街に住んでおられます。学生時代府中の下宿で一緒だった大隈琢己（養・S40）さんとは偶然シアトルで再会することになります。イチローが長く在籍したシアトルマリナーズの本拠地セーフコフィールドのそばで自動車修理工場を経営しており、当時、商社も含めた日本人駐在員が車の修理で随分お世話になりました。

次に、JICAの林業研究及び林木育種分野でプロジェクトリーダーとして海外でご活躍された林木育種の専門家古越隆信（林・S28）先生との関わりです。1990年11月から3年半、私はパプアニューギニア国（PNG）マダン州での植林事業に携わりました。

当時、本州製紙は製紙原料としてそれまでのユーカリ植林よりも成長が早く洋紙生産に適しているといわれたアカシア・マンギュームを1万畝の植林地に年間1200畝づつ植林し、8年後に伐採するという

「木の畑」プロジェクトを進めていました。その樹種転換時期、古越先生はPNG国森林研究計画派遣専門家として林産試験場での指導のためにご夫妻でラエに長期滞在していました。現地会社の総支配人を勤めていた私は、何度か先生にご相談し、種の採取から精英樹の作り方についてのご指導を受けました。

それから8年後、王子製紙富岡工場（徳島県）勤務となり、PNG植林地から生産されたアカシア・マンギュームのウッドチップを受入れるという、僥倖に巡り合ったのです。PNGのプロジェクトといえば、本州製紙先輩の佐藤和親（林・S34）さんは、はずせません。マダンに足かけ15年間駐在し、現地人に技術移転をした経験から、途中退職し、JICA国際協力専門員として中小企業での品質・生産管理の「カイゼン」活動を15年、その後もコンサルタントとして15年、世界60ヶ国で指導してきて、傘寿を超えた今もまだ頑張っていて私共後輩に刺激を与え続けてくれています。

海外へ出かけることが今程簡単ではなかった時代に同窓の先輩が海外で活躍されていた事実の一端をご紹介します。幸いです。

7. 所感

西村 寿（農工 S50）

個人的な思い出話になって誠に恐縮ですが、私は、昨年12月1日から本年1月31日まで、病気による入院生活、今も（2月末）自宅療養を余儀なくされ、いやが上にもこれまでを振り返り、これからどうするか見つめざるを得ないことになりました。

仕事の上では、京都府庁において36年間、退職後は関連する団体職員として3年間、大学で学んだ農業土木一筋に技術屋として勤めさせていただき、昨年5月にフルタイムでの仕事を何とか終えることができました。

仕事で、大切にしてきたことは、2つあります。1つは、現場中心できたということです。私たちの仕事（現場）は、その計画、設計、実施段階において地元や関係機関・団体と打合わせ約束してきたことは、成果品として現地に残ってしまいます。その一つ一つが日々の積み重ねであり、京都府内どこへドライブに出かけても、私も関与をさせていただいた施設（現場）があちこちに残っています。反省す

べきことはもちろんあるのですが、自分は責任を持ってこの仕事をしたという証明であり、私の心の財産となっています。

もう一つは、最近、大きな国民的課題となっている「大地震やゲリラ豪雨などによる危機管理」への備えです。私は、大学1年の時、「農業生産工学概論」の授業の冒頭、担当の行方教授が「農業土木の歴史の中で悲しい出来事がある。それは、農業用ため池が決壊して多くの犠牲者を出したことだ。それは京都で……」というような話だったのですが、当時、京都府出身の私も、「平和池」、「大正池」というため池が昭和26年及び28年の集中豪雨により相次いで決壊し、下流の多くの方が犠牲になられたことを知りませんでした。（東日本大震災においても、ため池の決壊により犠牲者が出たということですが、本当に気の毒でなりません）また、大学4年の時には、多摩川の農業用取水堰である二ヶ領宿河原堰（狛江市）の取付護岸付近が破堤し、多くの周辺家屋が流失し、自衛隊が出動してコンクリート堰堤を爆破するという光景を目の前で見るという経験をしました。（TBSテレビの「岸辺のアルバム」というドラマにもなりました）

この様な中で、私は京都府において最初の職場として本庁の防災係へ配属されたのですが、これらのことが、その後の私の京都府職員としての方向を決定付けました。鳥インフルエンザの鶏の埋却処分（平成14年発生）などの危機管理も含め災害発生時に備え、事前の訓練（シミュレーション）を怠らず、ある意味、自分の身体への危険も覚悟して、逃げず、迅速、冷静に且つ形式的にならず、罹災者の立場を常に意識し、場合によっては自分の経験と想像力を働かせて二次被害等を防止し、現場を見た自分の判断で対応を決する（上司に報告する）ことが要求されます。その後も、毎年のように発生する危機的な事案に積極的に参画できたことを、もっと被害を減少させられたのではないかとこの思いと同時に誇りにも感じています。

反省すべきことは、もっと勉強し、資格等を取っておけばよかったと思うことです。

仕事以外のこととして思うのは、3年前の60才まで33年間、地元の小学校の少年野球チームの監督、コーチとして青少年育成の分野で多少なりとも社会貢献をできたことです。家族や地域の皆様のおかげで長年よく続けられたものだと有難く思っていま

す。この間子供のために教えてきたというより、私自身が子ども達から多くのことを学ばせてもらったというのが当たっていると感じます。

終わりに、これからは、地元への恩返し（実はこれまで、仕事と少年野球のために地元の役割分担や出演などを免除してもらったりで迷惑をかけていたこともあり）として準限界集落となった地域の村づくりや農業法人の運営（昨年に営農組織を法人化し理事に就任）に貢献したいことと、これまでの妻への感謝の気持ちをどのように形にするかということ。更には、自己啓発として、中途半端なところで終わっている「書道」や「英語会話」など2、3のことにもチャレンジしたいと思っています。体のケアも大事にしながら残された年数でこれらのことが少しでも充実するよう願っているところです。

（京都府支部長）

8. 蚕糸業に思う

藤井 昇（蚕糸 S51）

群馬県の西部に、赤城山、榛名山と共に上毛三山の一つに数えられ、奇岩と紅葉で知られた妙義山がある。この地域は群馬県の中でもとりわけ養蚕が盛んであり、ここで生まれた私は物心ついた時から両親が蚕を飼う姿を見ながら育ってきた。5歳（壮蚕期）ともなると、座敷の畳を上げ家中が蚕に占領される状態となり、寝室のとなりの部屋から“ザー、ザー”とまるで雨が降りしきるような、蚕が桑を食べる音が一晩中聞こえてきた当時の記憶を今でも鮮明に思い出すことがある。

昭和47年に農学部養蚕学科に入学したが、家業の延長として自然な形で自分の進路を選択したように思う。卒業後は、地元群馬県に奉職し、昨年38年間の勤務を終え定年退職を迎えた。私の県職員としての前半は蚕業試験場や県庁蚕糸課を中心に20年近くを蚕糸行政に携わってきだが、この中で最も印象に残っているのは稚蚕人工飼料センターの移設に係わったことである。これまでの施設は国の蚕糸試験場養蚕部が筑波に移転する際払い下げを受けた場所にあったが、国体関連施設建設のため急遽移転することとなった。県内各地から誘致がある中で候補地の選定、地権者との交渉、埋蔵文化財の調査、センター建物や機械の設計等々の業務を担当、分けても

土地収用法の認可を受けるため建設省に人工飼料や生きた蚕を持参し事業内容を説明、係官から農業施設関連で土地収用法を適用した前例はないと言われたことなど、今では懐かしい思い出である。

この当時、稚蚕人工飼料センターの移転と関連し“シルクスクエア構想”という計画が検討されていた。昭和50年代以降絹消費の減少等に伴い蚕糸業は縮小傾向が続いていたが、昭和62年群馬の製糸業の代表格であった片倉工業富岡工場がついに閉鎖するところになった。現在の旧官営富岡製糸場である。非常にショッキングな出来事であったが、同時に、明治維新後の我が国の殖産興業の先鞭を担った歴史ある施設を何とか後世に残し、地域の活性化に役立てる方法はないものかと考え、模索を行うこととなった。モデルには倉敷の“アイビスクエア”が念頭にあった。片倉工業へも閉鎖施設の利用を働き掛けたが、当時の状況の中ではなかなか理解を得ることが出来なかった。その後、多くの関係者の努力と片倉工業の英断を得て、昨年、我が国では初めて近代化産業遺産として世界遺産に登録されたことは、私にとっても感慨無量の思いがある。

群馬県では、現在も農政部には蚕糸園芸課、また、研究機関として蚕糸技術センターがあり、新たな可能性として遺伝子組み換え技術等を活用した蚕糸業の再構築に向けた努力が続けられている。私の県職員としての後半は一般農政分野に転出し蚕糸行政と直接係わることはなくなったが、定年後の今の思いは、富岡製糸場の世界遺産登録を追い風に蚕糸業の火が後世まで永続することを切に願っているところである。

9. 「731915」

佐藤 廣厚 (環保 S52)

1973年、農学部(1)環境保護学科(9)に入学、クラス名簿15番でした。いまだにこの番号を覚えています。高度成長期の京浜工業地帯で育った私は、自然や環境への思いを胸に受験、幸い合格することができたものの、中学から続けていた剣道部になんとなく入部したため、4年間の大学生活の大半は剣道部での思い出で占められました。小さな大学にもかかわらず部員は40人を超すほどで、稽古もずいぶん厳しいものでした。春・夏・秋・寒・新入生歓迎と年間5回の合宿を皆勤し、一方の勉学は卒業できる



ことを目標に効率的に単位を取っていたような次第ですが、剣道部の伊藤先生、先輩方はじめたくさんの人との出会いが今は私の宝ものです。

当時、環境を標榜する学科の設立は初めてで、一期生の我々は入学当初、学科の先生から、「君たちの卒業後はたくさんの活躍できる場がある」と言われたものの、4年間で2回のオイルショックを経て、卒業する時には環境分野に関する採用情報は皆無で、当の先生には「君たちの就職先は期待できない」と言われあつけにとられたものでした。

卒業しても行くあてもなく、研究生で在籍していた6月に、たまたま欠員募集で採用試験のあった京都府の林業職に、研究室の先輩のお誘いもあって受験してみると幸いにも採用。言葉も風土も異なる京都の北部日本海に面した丹後での社会人生活が始まりました。

新規採用で担当した治山の仕事は専門ではなかったと言え、周りの人に助けられ、公私ともに実に楽しく独身生活を送ることができました。剣道も少年剣道のお手伝いに始まり、社会人の方々にも仲間に入れていただき、以来転勤するたびに新たな稽古場などを紹介いただき、いまでは府庁剣道部の稽古にたくさんの先生や剣友が来られます。

仕事も終盤に近付くと部下のメンタル面での救済や、違法行為の訴訟や災害対応など、辛抱を強いられる場面が増え、また、最後の職場の森林保全課では、学生時代に保護を目指していた野生のシカを大量に駆除捕獲を進めるめぐりあわせに複雑な思いでした。

平成27年3月に退職、公益社団法人京都モデルフォレスト協会に縁があり、平成28年秋に京都で開

催される全国育樹祭に向け、ゆっくりする暇もなく慌ただしい日々を過ごしています。

改めて今振り返ると、いろいろの場面で、たくさんの方々との出会いが、私の人生をとっても豊かなものにしてくれていると感謝しています。

いまだに折に触れ、農工大農学部正門からのケヤキ並木、研究室で目が覚めると聞こえた馬のひづめのリズムカルな音、剣道部の年越し稽古と大國魂神社の参拝、畜産からもらった鶏肉を焼いて食べた研究室等々、数々のシーンがよみがえります。

10. 私の社会人人生

伊沢 英世 (電気 S59)

卒業して極東貿易(株)(以下K B K)に入社した。財閥解体の折三井系の機械部門が分離して起こした会社でいわゆる機械専門商社である。そこで計装制御部というところに配属されその時吸収した技術が今でも飯の種になっている。私が入社する10数年前まではアメリカ(U S ベーレー社)から制御装置・バルブ・発信機等を輸入して日本国内の火力発電所(主にボイラメーカー)に納入していた。私が入った頃にはK B KとU S ベーレー社が共同出資で日本ベーレー社(以下B J)という会社を設立して制御装置も輸入から国産化に移行しつつあった。U S ベーレー社がK B Kと代理店契約を結ぶときにサービス部門を作りなさい、といったいきさつが私の配属部門の生い立ちである。制御装置のサービスとは単体の調整はもちろんのこと、プロセス制御調整も行えということで、我々も先輩についていってボイラ調整を勉強した。昭和40年ごろからボイラ自体も進化し続け、その制御システムを構築していったのもK B K設計部門であった。ボイラは高効率化をねらって、ドラム式ボイラから定圧還流ボイラ、変圧還流ボイラと変遷し、燃料も重油からL N G / L P Gガス、石炭と様々。制御装置も空気式から電気式を経てデジタル制御装置へと変遷している。

昭和58年頃はさすがに高度成長時代に比べると国内発電所建設も一段落していたが、大型の最新式ボイラがぽつぽつと建設され、我々の世代(マイナス10年くらいまで)がどうにか国内発電所で調整を勉強できた最後の世代といえる。ボイラ制御だけでなくプラントの発電量も統合した制御システムとなり

より複雑化して、一人前になるのに7~10年はかかる専門職といえる。ここ15年くらいは国内の発電所の建設がほとんどなくなり経験を積む機会がなくなり余計に技術者が育たなくなっている。職場は発電所であり、いったんとりかかると長期出張(10~15か月程度)となり、少人数の仲間とあとは社外の人と協業である。こんな生活になじめない人もいて我々の周りも残ったのは3割程度である。

私は学生時代もワンゲルでその辺をふらふらしていたこともあり、出張生活はあまり苦にならず、かえっていろいろな国にいけて面白いとさえ思っている。

会社も国内発電所の建設が減ってからいわゆるリストラがあり、平成15年にK B KからB J(現A B B日本ベーレー社)に移籍し、2年後平成17年にK B K調整員だけでコンバージェンス・テクニクス(株)を設立して現在に至る。

ここ5年くらいでも、アメリカ(エルム・ロード発電所)、ドイツ(リュネン発電所)ときて現在(平成27年3月)はベトナム(ギソン発電所)で仕事をしている。

大学生2人を抱える親としてはまだまだ頑張らねばと思っている。



ドイツ出張中に休日を利用して
ブラハへ小旅行(2012.4.29)

I-2 学生生活

1. 人間形成となった忘れ得ぬ人と仲間達 — 剣道部の思い出 —

生沼 俊夫 (養蚕 S35)

昭和31年の春、晴れの農工大学生として西ヶ原寮

に入り、間もなく先輩と思われる数人とある人が部屋に入り、正座して「皆さんどうか剣道部に入ってください」と精悍な顔つきにやさしさがただよう人が入部を勧誘に見えた。この人こそ私の人間形成上、大きな指標となった伊藤金得先生でした。東京高師（現、筑波大）を卒業し、江田島の海軍兵学校体育教官、その後、学位と叙勲を賜った人であった。

初めての稽古の時、先生に竹刀を叩き落された為、私は柔道の内股を掛けた、と先生は透かさず、私の面を剥ぎ取った。後刻、「おい、今度の新入部員の中に入部を間違えたのがいる。まったく気の強い奴だ。」と言っていた。

ある日、先生に突きを8発も受けて首が紫色に変色し、食事も喉を通らなかつた事、また、にらみ合っただけで、一度も打ち合わないのに私は息が止まり、その場に倒れてしまい、寮に先生より果物籠が差し入れられた事があった。

部費で防具を購入したり、遠征をしたので、費用を得る為、ダンスパーティをしたり、全員で運動場の除草をし、その費用に当てていた。ある日、運動場で枯葉を燃やしていたら、先生の見廻りがあった。

「先生の実家からのサツマイモです。一つ如何ですか？」先生は焼きイモを食べながら、「岡山のイモはなるべく止めなさい。」と言われた。総てお見通しであった。それからは岡山のスイカ、野菜とその周りで採れたものは、全て岡山のものと呼びました。

部活で一番つらいのは、夏期・冬期の合宿であった。主として、西ヶ原寮、学芸大（女子を含む）での雑布がけで、手足が動かなくなった。出稽古は東京水産大学（現、東京海洋大学）、試合は三多摩地区国公立大会、三繊維大学対抗戦、小金井町体育大会、近藤勇の墓前試合等があった。

部員は昭和32年卒の星川先輩（初代主将）で、総てに秀で、彼と一番多く稽古をつけていただいた。

昭和33年は松岡先輩（第2代主将）、昭和34年は中川（第3代主将）伴、印木、品川、山下、生垣の各先輩、昭和35年は小池、平塚、村上、国定、小生（第4代主将）。中でも、平塚兄が一番のポン友で、後には大変、お世話になった。

その他、後輩には都田（第5代主将）、田村（第6代主将）、河田などが活躍された。皆さんは国、県などで活躍、地位を得られております。

今も先生のご家族や剣道部とかかわりのあった

人々全てとご挨拶だけは欠かさぬようにしております。

最後になりましたが、農工大剣道部が益々、栄えらん事を心より祈ります。

2. 半世紀前の奈良にて

太田 道明（農工 S42）

半世紀以上も前の古い話で恐縮だが、寮生活も2年目を迎え、多少は部屋の怖い大酒呑みの先輩達に慣れてきた頃、同輩から出身地の九州の話が出た。その当時はまだ未知の土地であったので、興味津々で時間の経つのも忘れて聞き入った。話の熱が入ると頻繁に方言が出て、話しの中身については半分程しか理解できなかったが、雄大な阿蘇山をはじめ、球磨川や青島などの話を聞いているとすぐにでも行きたくなるような中味であった。

熊本と東京のほぼ中間点にある私の家を基地として、奈良方面に行きたいという友達が3人おり、夏休みの当初に行くことになった。初めて奈良県に来るといふ人もあり、まず東大寺をメインに周辺を見学することにした。いつ見ても荘厳な大仏を拝み、一方、神様に祈るために春日大社に。スケールが大きい。このあと興福寺を回り北方面に行く、私の中学時代、近親者が浄瑠璃寺に嫁入りしたと聞いていたので、良い寺名ということもあり、一度はお参りしたいと思っていたので、この際、参拝することにした。勿論、友達はそういうことは知らないで、未知の当尾^{とうお}の岩船寺と浄瑠璃寺の参拝に大いに賛成してくれた。東大寺から数kmしか離れていないのに、なんとという静寂な場所なんだろう。都会の喧騒と無縁の岩船寺と浄瑠璃寺を結ぶ道に残された石仏群には感動させられた。表情豊かな石仏群は筆舌に尽くしがたい、加えて地道に野菜などを並べて売っている無人スタンドを併せてみると心をなごませてくれ、本当に来てよかったと思った。二泊三日の翌日は今回の主目的である法隆寺とその近辺であった。

東大阪から法隆寺に行くルートとして奈良県との県境にある信貴山の朝護孫子寺^{あさごそんしじ}をお参りしてから龍田大社を経て、通称ぼっくり寺として有名な吉田寺^{きちでんじ}で和尚の法話を聞き、法隆寺に着いた。ほぼ同時期に建てられたという法隆寺、法輪寺、法起寺の三寺

す)で旧友に会う楽しさに「心底この大学で良かった」と実感した次第です。

ところで、近年の東京周辺再開発はすさまじく、国分寺(特に北口)は駅前にかつての姿が無くなりつつあります。また、府中も大國魂神社を除いて昔の様子はありません。飲んだくれ、酔いつぶれた校外学習の現場はすでに史跡と化しているのです。“悪ガキ時代を共に過ごした諸君！一度是非訪れてみましょう。一緒に…”



再開発進む国分寺駅北口



唯一残る北口～南口への
線路際抜け道

4. 東京農工大学農学部本館および 東京大学教養学部101号館の建築 様式と農学部の変遷

池田 和弘 (林 S61)

東京農工大学農学部本館(以下、農工大本館)は、明治31年に東京帝国大学農学部(以下、農大)に併設された実科が、昭和10年7月に東京高等農林学校として独立

し、府中演習林敷地内へ移転する際に新設された(写真-1)。設計は、東京帝国大学工学部建築学科の教授であり、東京大学構内の建築物の多くを設計した内田祥三氏による。構造は、中央に講堂を配置するE型平面の鉄骨鉄筋コンクリート造り、2階建て、一部3階建てであり、中央部に時計台を冠する。

昭和8年4月着工、9年3月の竣工、建物面積は2,890㎡である。



写真-1 東京農工大学農学部本館

一方、東京大学農学部の黎明期は、明治10年東京府荏原郡目黒村駒場(以下、駒場)に設置された農学校に遡る。明治15年には東京府北豊島郡西ヶ原村に東京山林学校を設置、明治19年に合併し、東京農林学校が駒場に創設された。明治30年に東京帝国大学農科大学を経て、東京帝国大学農学部(以下、農大)に改称したのは大正8年12月のことである。その後、総合大学の一体化構想により昭和10年7月、東京市本郷区向ヶ岡弥生町にあった第一高等学校と駒場の農学部の敷地交換が行われた。昭和22年10月、帝国大学令等改正により東京大学農学部となる。なお、駒場に移転した第一高等学校が現在の東京大学教養学部である。

この教養学部構内に入り1号館前を右に過ぎると、木立の中に白い壁の101号館が見える(写真-2)。この建築様式が農工大本館と酷似しているのである。明治以降の建築物を見て回るのがささやかな楽しみである私は、思いがけない新発見をしたような気持ちになった。この建築物は、第一高等学校でかつて留学生が学んだ特設高等科校舎である。凸型平面の鉄筋コンクリート造り、2階建て、増築分を含めて昭和10年度の竣工、建物面積は529㎡である。設計は農工大本館と同じ内田氏によるもので、意匠的類似性が高く雰囲気もよく似ている。両者を比較すると、101号館には通称犬小屋と呼ばれるアーチ



写真-2 東京大学教養学部101号館

型玄関と尖峰型屋根、その上にアカンサスの葉の装飾を載せるが、農工大本館のアーチ型玄関は矩形の平屋根である。

内田ゴシック様式は、関東大震災で壊滅的被害を受けた東京帝国大学の復興に際し、農学部を含む全ての学部で採用され、震災後わずか20年位の間に構内を重厚感のある建築群で統一することに成功している。アーチ型玄関と四角形または八角形に張り出したファサードを有し、一定間隔で配置される柱状の控壁を含む建物全体が茶褐色のスクラッチレンガで覆われるのが特徴である。ところが農工大本館と101号館にはファサードは無く、主壁と柱状控壁はすべて白色モルタル塗装である。スクラッチレンガは玄関柱とアーチの辺縁部、窓枠の上下のみ使用されている。この点でいわゆる内田ゴシック様式とは一線を画し、他に類例を見ない。ここで不思議に思うことがある。東京高等農林学校と東京帝国大学農学部は互いに農学という共通項を持つが、特設高等科校舎（現101号館）は第一高等学校として新設され、農学部とは既に関係が無かったはずである。同時期に建設されたとはいえ、二つの建築物に統一性を持たせた理由が判然としないのである。

農工大本館は平成12年に国指定登録有形文化財となった。登録基準は「造形の規範」である。本年度は改修工事が予定され、時計台も含まれるが、四面に配された文字盤を東京高等農林学校時代と同じローマ数字に戻すことが決まっている。どんな表情を見せてくれるのか、完成が楽しみである。

最近、かつて農学部生であっても農工大本館の存在を知らない卒業生がいることを知って驚いたことがある。楓寮と研究棟の間を往復するのみで、外界に出るには南門だけを使っていたようだ。私は入学早々休学届を出すような世間知らずで、将来像も決

まらないのに早く社会に出たい、という焦慮と不安の中にあつた不甲斐ない若い頃を思い出す。さて、あなたにはこの白亜の時計台にどんな思い出があるだろう。

参考文献等

- ・内田祥三先生作品集：内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編、鹿島研究所出版会、昭和44年11月、内田祥三史料目録：東京大学史史料室編2008年3月
- ・UT-Life in The University of Tokyo
<http://www.ut-life.net/guide/map/komaba1/column01.php>
- ・第一高等学校六十年史：第一高等学校編昭和14年3月
- ・東京高等農林学校一覧 昭和17-18年：東京高等農林学校編、昭和17年11月、国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1277217>
- ・東大農学部の歴史：東京大学大学院農学生命科学研究科広報室 <http://www.a.u-tokyo.ac.jp/history/>
- ・文化庁 国指定文化財等データベース登録有形文化財（建造物）<http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist.asp>
- ・文部科学省文教施設工事情報 調達情報公開・収集システム 発注見通し一覧 <http://sisetuweb1.mext.go.jp/mdbskn/frontsite/MF000.asp?BT=M>

5. 農工大、私の原点

石坂 貴秀（機シス院 H16）

今回寄稿する機会を頂き、振り返ると、大学時代に経験し学んだことが、今の自分を構成する原点になっていると改めて感じました。

私が農工大を志望した動機は小さい頃から自動車、特にF1レースが好きで、空力（流体力学）を勉強したいと漠然と思ったことがきっかけでした。機械工学が学べ、府中市の自宅から近いことが選んだ理由でした。

そんな思いを胸に入学しましたが、大学時代前半の記憶のほとんどは、入学当初から所属した自動車部での活動です。アルバイトをして中古の安い車を購入しましたが、よく故障したので、必然的に修理、



整備の仕方を学ぶことになりました。また、安全運転やモータースポーツのような速さを競う運転も含め、どうすればもっと運転技術を上げられるか、といったことを部員達と毎日話していました。学生で車を保有することは金銭的に厳しく、貧乏生活を送っていましたが、自分のやりたいことに本気で取り組み、大きな充実感を得ることができました。

大学時代前半は部活動に忙殺されていましたが、後半の4年生～大学院生で印象に残っているのは研究室生活です。研究室選びをする段階になって、当初の思いであった流体関係の研究がしたいと考え、熱流体の研究をしていた望月先生、村田先生の合同研究室に3年間所属しました。特に印象に残っているのは、研究の成果報告会である輪講で、徹底して論理的な説明が求められることでした。“考察”という言葉の意味と重さを、初めて実感しました。もうひとつは、輪講の資料を毎回英語で作成する必要があったのと、年に数回は資料だけでなく発表も英語で行ったことでした。大学受験以来、英語に触れる機会はほとんど無かったので慣れるまでは大変でしたが、英語への抵抗感を払拭することができた貴重な体験となりました。

卒業が近づき就職活動が始まると、まず考えたのは、やはり自動車業界で働きたいということ、そして自動車部での活動から、自動車の構造そのものよりも、運転技術の方に興味があると感じ、路面と唯一接する部品であったタイヤに興味を抱くようになりました。その結果、自動車用タイヤメーカーの横浜ゴムに入社しました。実は農工大OBの方が多くいる、ということも後押しになりました。

入社後は主に設計部門で商品開発を担当しました

が、仕事への取り組み方は、研究室時代に教わったことをそのまま応用することで対応できたと思います。今現在はタイの関連会社に出向し、タイ現地スタッフへの教育と日本とタイの橋渡しといった仕事を担当していますが、ここでは、研究室時代に英語に触れていたことが役に立っています。

今思うと、全ての経験が繋がりと、今の自分があるのだなと強く感じます。これからも何かに悩んだり迷ったときには、原点ともいえる農工大での活動、経験から思うことを大切にしたいと思っています。

6. 外食のすすめ

関口 拓史 (生命院 H24)

はじめにお断りしておきますが、ここに書かせていただいたことは決して生協へのバッシングなどではありません。在学中、生協にはお世話になり大変感謝しておりますし、私が卒業する頃にはエリプスができ、最近では生協食堂もリニューアルオープンしたと聞きます。在学生の方はさぞかし、充実した学食ライフを過ごせていることでしょう。

私が学部生だった頃、昼食は学食一択でした。限られた選択肢の中で、次第に注文メニューは固定化されていきます。学部3年の頃には、さんま定食、クリームチーズメンチ、ラーメン、弁当でローテーションが構成され、学食での昼食はもはや作業とって差し支えないものになっていました。

そんな折、4年生になって研究室に配属され、食環境に劇的な変化が起こりました。学食に行くという習慣は跡形もなく消え、常に学外に食を求めるといった新たな局面を迎えました。今まで行ったことのある店は、駅前の中華屋さんのような誰もが知っているようなお店しかなかったのですが、数か月もしないうちに食べログでいえば3点以下、ネット上では見向きもされないお店を知るようになりました。大学周辺には、それでも个性的で、記憶に残る名店がたくさんありました。最高のコストパフォーマンスで美味しい焼肉定食や油そばなど食べられる中華料理屋、店名がしょっちゅう変わるけれど店員も料理の味もずっと変わらない謎のインドカレー屋、店内には煙がたちこめ服に染み付く匂いが気になるけれど、美味しいハンバーグ屋など……日々、様々な店に通い続けました。

記憶のメカニズムについては詳しく存じ上げませんが、感動や怒りなどの感情を伴う経験、痛みを伴う経験は記憶に残りやすいものだと思います。実際、学生時代のエピソードの中でも特に記憶に残っているのは、外食での美味しい思い出とセットになっているような気がします。たとえば、研究室の先輩に日本酒バーへ連れていってもらい、初めて日本酒が美味しいと思えて感動したこと、論文投稿が終わった後に飲んだビールがたまらなくうまかったこと、なじみの韓国料理屋に行ってサービスで提供された料理があまりに多く苦しんだことや、美味し

いカレーを堪能しつつも、隣で食べる友人のあまりの遅さにイライラしたこと……。学生生活の記憶が、食事を通じて鮮やかに思い出されます。学生にとって、金銭面では多少厳しい部分もありましたが、あの頃いろいろなお店で食べてよかったなど、今になって強く感じています。もちろん、さんま定食を食べたら、学食の騒がしい雰囲気やあの頃友達と話したことを思い出すかもしれません。ただ、あまり期待はできないでしょう。社員食堂で食べてるものとほとんど変わりませんので。

コラム<復興> 1

福島県に応援職員として出向した1年を振り返って

園田敬太郎（農 S61）

東日本大震災と同時に発生した東京電力(株)福島第一原子力発電所事故は、周辺地域に多量の放射性物質を放出し、いまなお多くの方が避難生活を余儀なくされています。

震災から3年が経過した平成26年度に、私は滋賀県から福島県へ応援職員として派遣されました。事故直後から行われてきた「農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング」の調整や公表にかかる業務を担当することとなり、毎日行われる分析結果を市町村、関係団体へ通知し、報道機関への情報提供を行ってきました。福島県では、福島民友と福島民報という2つの地方紙がありますが、毎日モニタリングの結果を掲載してくれています。生産や出荷販売に関係することなので、県民の関心も高いことが背景にあります。

出荷制限をかける必要のある結果が伝達されると、すみやかに出荷自粛要請を行います。こうした際には、農林水産部幹部への説明に引き続いて、記者レクを行うことになっており、時間的にタイトな中で調整を行ったことは、厳しくもありましたが今ではよい思い出になっています。

また、県民をはじめ全国の方々からの農林水産物モニタリングに関する問い合わせの対応も、重要な業務の一つでした。時々「福島県を応援している。」という有り難い電話もいただきましたが、多くは不満や不安であり、「これから山菜をとり仲間と行こうと考えていたが規制がかけられた。」、「東京の娘や孫に、畑で採れたものを送っていたが、福島産はもういらぬと言われた。」、「検出限界以下でないとならば危ないのでしょうか。」、更にあきれたことには「放射能は伝染するのではないの?」といった電話までありました。

これらは、リスクコミュニケーションの一つになるのかと思います。放射能に対する正確な情報を関係者や住民につたえ、情報を共有するという意味合いですが、なかなかこれが、そう簡単にいかない。原因のひとつに低線量被曝について二通りの見解があり専門家間でも議論が続いていることがあります。ある境界値より少量の被曝は安全だとする説（閾値あり）と、どのような線量であっても放射線被曝は生体に有害であるとする説（閾値なし。LNT仮説）です。ただ低線量の影響について、他の発がん要因と比較した場合、喫煙や肥満などの影響の方がはるかに大きいことも分かっています。私は、低線量の放射線に対しては必要以上に恐れることなく、同時に無関心でもなく、よく考え自らの答えを求めていく姿勢が大切だと思っています。

さて、樺寮で同室であった緑川弥寿彦くん（写真左：環保63年3月卒）が福島県職員であり、県内を案内してもらうなど世話になりました。いっしょに遊び倒した弟分のような存在ですが、こうして出会うのも妙な気がします。彼は環境保護学科でしたが私に馴染んだため、ゼミは農学科肥料研にいきました。今回、また彼の人生に余計な影響を及ぼさなかったか心配しています。

林業振興課の渡部正明主幹をはじめ、何人かの農工大卒業生といっしょに仕事をする機会もあり、また7月の同窓会もたのしく過ごせました。この場をかりてみなさんに感謝を申し上げます。



緑川弥寿彦さんと
（郡山市にて 平成27年1月）

II. 絆を深める

1. クラス会60年の歩み

藤本 吉幸 (林 S30)

1951(昭和26)年農学部入学当時、北多摩郡府中町周辺は、まだ武蔵野の面影をとどめていた。

京王線府中駅で降り、大國魂神社から続く櫛並木の下を通る大学までの道は人家も少なく、商店なども数えるほどしかなかった。通学には農場や馬場のある裏道を使うことが多かったが、周りはほとんど麦畑だった。国分寺にかけての一带にはクヌギ林も点在していた。往年の駒場は知る由もないが、西条八十作詞になる駒場小唄の「雲とマタ自由の住むところ」を思い浮かばせる雰囲気であった。

最初、農学科に入ったのだが、二年次に林学科に転科して専門科目が始まった。林学科の特徴の一つに、1週間程の泊まり込み実習があった。最初は東大清澄演習林での林木学だったが、この頃はまだ米が配給制の時代で、皆それぞれ何合かをもちよった記憶がある。その後、草木(測樹、製炭、造林)、瀬戸(測量、砂防)、天城国有林(経営案)等で、5~6人ずつ5班に分かれての実習は楽しく、同じ班だった者同士の結びつきは卒業後も特に固かった。また「あわや!」ということも何度かあった。山火事を起こしかけたこと、街へ飲みに行った連中が地元のチンピラに絡まれたこと、近くの工事現場のヨッパライに因縁をつけられたこと等々で、「山火事」では夏目先生に大変なご迷惑をおかけしたが、他は何とか「武力行使」することなく解決した。これらの「事件」への出席率のよかった猛者連中も齢八十を超し、風になってしまった者もいる。夏休みには先生方のご紹介で国有林等にアルバイトに出かけ、9月には体験談を披露しあったものだ。

1955(昭和30)年林学科卒は、同窓会名簿では28人になっているが、転学者や病休延伸組を加えて、私たちは30人を同級生としている。卒業後しばらくの間、クラス会は京浜在住者を中心に、地方在勤の者が上京する折などに随時開催、といった感じだった。その内、何年おきかに箱根や湯河原に一泊で行われるようになり、やがて大方の者が勤務先を卒業する頃になると、

毎年やろう、ということになった。入江、小池、志村、高西、竹腰等の諸君が常任幹事の労をとってくれたが、残念ながら正確な日時・場所・参加者数等の記録や写真は、完全な形では保存されていない。1996年からは志村が担当、記録もしっかり残してくれてある。それによると、18回中12回は熊本、草木、甲子、高峯、母校、湯沢、男鹿、佐賀、岡山、三保、おごと、と在住者の地元周り番で行われ、2013年熱海を以て千秋楽とした。その後は横浜での昼食会とし、最近は2015年5月28日に行われたが、すでに10人が風となり、療養・闘病中の者もいるものの、20人中11人が元気な顔をそろえた。酒量はさすがに減ったとはいえ、会はいつも楽しい。上記の諸君をはじめ、会のために一生懸命だった同志に感謝を捧げ、あと何回かは20人で顔を合わせたいものと願っている。



2. 55年間続くクラス会と文集発行

馬場 信行 (林 S35)

私達、昭和35年(1960年)林学科卒の一同は山梧会と銘打って、毎年クラス会を開くと同時に文集も発行しています。山梧会は三五会であり、林学に相応しく山と梧(アオギリ)から名前を付けました。毎年1月に東京近郊の参加者で東京下町に座敷を借り、新年会を開いています。座敷というのはよくしたもので、肩を組んで名物のペロリ節を踊ることができるからです。5年に一度は全国の有志に声を掛け、府中で一泊し、総会を開いています。府中には天然記念物で農工大のシンボルでもあるケヤキ並木があり、学生時代は夜のたまり場でもありました。全国から参加して貰うので、総割り勘制にしています。交通費も含め合計金額を参加者数で割ります。一人当たりの負

担額はほぼ同じです。

今年も5月24日に農学部正門前に集合し、案内を森林生態学の戸田先生が好意的になさってください、久々に学園のそぞろ歩きを楽しみました。その後、ホテルの集会場を使って、総会を行いました。

5年毎の一泊集会は皆春秋が高くなったので、今回は3年後に変更しました。総会終了後には、ミニ宴会場になり、ウエイトレス3人の美食サービスと同級性持参のマタビ酒を含めて飲み放題で、皆さん55年前の学生に戻りました。隣のパブでは、5年前のママさんの名刺もありましたので、有志6人で美人ウエイトレスも誘って、繰り出しました。懐かしいママさんがいて、日曜の夜で客も少なく、貸し切りの状態で飲み、歌い、時間の経つのもわずれました。翌朝7時30分、朝食バイキング食堂に集合し、昨夜は蝶ネクタイ正装の参加者も今朝はシャツも服も着替えて、ラフでした。8時30分、ホテル前で解散し、有志は大國魂神社へ参りました。

ついでながら、毎年発行しているクラス会誌も55年になりますが、恐らく55年続けて発行しているクラスは山梧会だけと思い、バックナンバーをまとめて図書館に寄贈することになりました。山梧会還暦まではみんな元気であるように。それは東京オリンピックの年です。幹事様、いろいろご苦労さまでした。

(東京都支部長)



3. 卒業後50年目のクラス会～母校訪問

小熊 和政 (機械 S39)

時は平成26年11月9日。かんぼの宿青梅の一室、開宴の乾杯で「サプライズ」を喜ぶ23名の歓声に満たされました。農工大機械工学科昭和39年卒のクラス会です。サプライズ、追々語りますが、そうです予想しなかったことが起こったのです。

昭和39年に卒業した級友は33名、あの世に旅立ったのが2名、所在不明が3名、残った28名が連絡を取り

合える仲です。機械工学科2期生として入学した昭和35年は、安保闘争真っ盛りでした。当時一年生は府中キャンパスの教養学部で講義を受けました。講義ならぬ抗議集会にも参加し、国会周辺のデモも体験しました。二年生になってからの小金井キャンパスは、正門から真っ直ぐ伸びた道の左側に鉄筋コンクリートの4階建てが二棟、一面の桑畑のなかに。繊維学部から工学部になったのはこの年か翌年かでしょう。

平成25年5月那須高原でのクラス会で「来年は卒業50年目母校を訪ねてみようや!」と衆議一決。「農工祭」をターゲットに計画し、翌年“主人の学び舎を見てみたい”との要望を耳にして夫婦参加型の開催案内となりました。母校訪問参加は級友17名、奥様5名。

平成26年11月9日クラス会当日、朝から雨模様。東小金井駅前午後1時に集合し小金井キャンパスへ。東門で西澤先生にお会いして皆に紹介。そこででの記念撮影がこの写真。



「荷物置き場にどこかの部屋を提供してくれませんか?」との依頼を一度は断られました。こんな経緯があって、どんな部屋かなと思いながら西澤先生の案内に従いました。ところが、その対応にビックリ。机や椅子の立派な部屋で機械システム工学の現状をプレゼンテーションして下さったばかりでなく、お茶菓子の接待まで。ひとつ目の“サプライズ”。

72歳を超えた老体の疲れも癒されて、構内の見学へ。「正門と本館は昔のままだね。」

「展示で説明を受けたいけれど、全くついていけなかったよ。」「西ヶ原寮の所にあった桜かな?」「グラウンドは昔より狭くなったかしら。」等々昔を思い出すのに余念がありません。辞して宿へ。かけがえのない時間を、西澤先生、ポンサトーン先生には心から感謝します。

かんぼの宿青梅では、宴会です。酒量は減ったもののよく飲みよく食べる仲間です。奮発した“松茸会席”料理が好評でした。母校訪問の感想やら年寄りにお決まりの病の話など、歓談は尽きません。宴会場から幹事の部屋に移って夜中の12時過ぎまで楽しみました。

全員が還暦を迎えた頃から毎年開催しているクラス

会です。でも毎日会っているが如き雰囲気“何故だろう”と不思議に思うのです。若き時学業に励んだ(?) 4年間でそれを醸成したとするならば、大学生活は素晴らしいものだと言えるでしょう。

翌10日の朝6時過ぎ、部屋のカーテンを開けたら青空に太陽が…前夜の降りでは明日は絶対に雨と決め込んでいたのでこの光景にビックリ。これがふたつ目のサプライズ。

楽しいクラス会でした。また来年元気で会いましょう。その後、12名で奥多摩の御岳の山に登り、御岳神社にお参りました。「噴火をした山?」「いや、それは岐阜の御嶽」などの会話をしながら、良い汗をかきました。皆さん、健脚でしたね。余禄の二日目も元気をもらう行事をしています。“素晴らしきクラス会”幹事の手前味噌かしら?

4. 入学後48年、農業生産工学科クラス会

大亀 哲郎 (農工 S46)

2015年5月22日、1967 (S42) 年入学者のクラス会を渋谷・宮益坂のレストランで行った。卒業は中心が1971 (S46) 年ではあるが、当時の在籍者数は約40名。16人が集まったので、40%が集まった計算になる。

日程は、翌23日に農工大同窓会本部の総会が招集されていることもあり、地方在住で会役員を務める諸氏も集まりやすいという機会を活用したものだ。卒業以来という顔合わせもあり、お互いにその変貌ぶりに驚き、また、再会を悦びあった。思い起こせば、我々はベビーブームの団塊世代、学科定員が30名だった原則を抜け、10名増員の恩恵にあずかった時代の入学だった。

宴が進むうちに、在学中の話題、卒業後の実務…御多分に洩れず言いたい放題。増員のおかげで真面目な学生の中に、可笑しいタイプも交じっていたとの自画自賛?も発せられた。

参加者の一端を紹介すると、在学中から高知出身の強印象を残し安芸と土佐の違いを力説した有沢氏。石川県から駆け付けた県庁OB北川氏。北海道からは道庁OB宇野沢、北大退職長谷川氏で、両氏が今回のクラス会の旗振りをやってくれた。福島県からは福地氏、県庁在籍時に東大で学位を取ったと同席者からすっぱ抜きつつ賛辞が呈せられた。現役時代は葛飾区で公務員生活だったが、今は復興支援活動のため気仙沼市で暮らす上田氏、彼は地元名産の塩辛を人数分土産とし

て持参してくれた。

国際事業に関わり海外勤務が長かった今村、佐藤氏。研究室単位では最近、毎年同期生は集まっていると報告してくれた上甲氏。横浜市在住メンバーも集まっていると続くのは同佐藤、丸山、渡辺氏。生産工出身者にはおなじみ栄設計の仕事続ける風間氏。水の相談所を開く水環境専門家桂川氏。仲間との会食を中座して会場へ駆けつけてくれた百瀬氏。生活の糧を農業工学専攻者とは別世界に求めた皆川氏と筆者・大亀とこれで16名、駆け足で紹介をした。

宇野沢名幹事長からは、不参加者も含めた各位の近況報告状をまとめたシートも会場で配られた。出席者だけではなく同期皆さんの現在の暮らしぶりが分かり、仲間の健在ぶりを確認した。

一人一人の自己紹介スピーチが続いて、話題は尽きなかったが、これからは「毎年集まろう!」と怪気炎が上がった。今回は都合がつかず参加できなかった同輩のみなさま!文頭で「入学者…」と発しているのは、卒業がずれた、他学科へ移った、入学年度は違ったが授業・実習は同期だった!?農工大時計台本館でもバリエーションが築かれた歴史を知る我々、大学が揺れ動いた時代に過ごしたがゆえにクラス会の構成は柔軟だ。歴史が重なる方々は、ご遠慮なく集まりましょう。

事務連絡は東京在住の方が核になれると、指名された。ご関心がある方は大亀(だいき)へ、メール問い合わせを! daikijucc@dream.com



左前列(福地、丸山、風間、上甲)、左後列(宇野沢、有沢、佐藤、百瀬)
中央から右へ(桂川、北川、上田、渡辺、皆川、今村、長谷川、大亀)

5. 大野研同窓会は、「正月の集い」が原点

橘川 達史 (工化院 S49)

◆大野研究室は、昭和23年から59年(1948~1984)工業化学科高分子化学講座を持った大野 泰雄先生の部屋である。卒業生は35年間、148人を数える。

◆大野先生は、東京農工大の命名、繊維学部から工学

部への命名に関わり、筆者の年代では、学生部長、工学部長を歴任され、本学ならびに昭和女子大学の修士、博士課程の創設に尽力された。

- ◆同窓会は、平成13年、先生の13回忌に昭和31年卒の佐野常道氏が有志を募り、鎌倉のご長女の宅に集まった時を第1回として本年で第15回目に達している。
- ◆筆者は、第2回以降、幹事をさせて頂き、毎年3月の第1土曜日に、鎌倉霊園の墓前に合掌し、事後鎌倉の小座敷で懇親会を開いている。出席者は、遺族を含め、20人前後の集まりになっている。
- ◆墓所は、先生が先逝かれた奥様のために、将来ご自分が入ることを見越して、皆がレクリエーションを兼ねて、集まれるように決められたところである。
- ◆発足当初、同窓会の呼びかけは、助手の佐藤俊彦さん（元助教授）のお持ちの、卒業生の就職先の記録を頼りに有志を電話で誘い、往復はがきでお知らせし、任意声をかけてもらった。
- ◆第5回以降は、農工大同窓会会員名簿などを参照し、メールアドレスを名簿に加えて、昭和54年M卒の丸山昭洋君に整理、メール配信をして貰って、初めて全国規模の配信ができた。
- ◆先生の逝去後、翌年までに卒業生は先生の旧宅に集まり、分厚い追悼文集を作った。
- ◆それにもかかわらず、以降12年間、一同が集まろうと呼びかけるものが居なかったのは驚くべきことであつた。
- ◆大野先生存命のころは、毎年正月3日に目白の先生宅に、現役、卒業生を招集し、一度に30人以上の在校生と卒業生が集まった。そこで現役は、古参OBなどの顔を知った。
- ◆先生は話し好きで、「キミー、キミー！」と、次々と卒業生を指名し、みんなで議論の場になった。
- ◆この正月の集いは、奥様が亡くなるまでは、手料理でおもてなしを受け、娘さん2人も同席されていた。地方勤務のひとつも、夜行で勤務地に向かった。
- ◆卒業生にとって、和気藹々とした、将来の家庭の姿を彷彿とさせる場所だった。
- ◆同窓会はスーツ、ネクタイではなく、凜とした雰囲気ではないが、生前の正月の集いを思い出し、先生の暖かさを懐かしむような集まりとなっている。
- ◆大野先生は、中学生のころから自宅庭に研究室を作り、紙、パルプの製造をして、そのころからセルロースを試験管の中で生成する夢を持たれていた。研究室初期には、研究室前に綿木を栽培し、綿花の生育

過程を調べることによって、セルロースの重合過程を追跡しようとしたと聞く。また、前後するが、戦時には、東工大学生から陸軍登戸研究所の技術将校となり、短期間でコンニャクマンナのゲル化条件を策定し、風船爆弾に関する成果をあげられたと聞く。（追悼文集「大野泰雄の思い出」1990.6非売品）

- ◆大野研のように、没後27年となる研究室メンバーは、そろそろ全員が会社から離れて第2の楽しみを求めている時期になっている。一方、第2の人生は終わりが無い。
- ◆初期のOBは90歳近く、最若年はまだ現役だが、同窓会は、このように未だに昔の「正月の集い」のノスタルジーをもとに開催している。遠方の方には大変だが、当分はご容赦頂きたいと思っている。



6. 農工大OB会のありがたさ

山口 知幸（農院 H6）

皆様にもいろいろなOB会のつながりがあり、そのありがたさを感じることがあると思います。私も最近、長年探していたものが、農工大OB会のおかげで、不意に実現したのです。

まず、土の中の微生物を上手く働かせられれば農産物生産が上がるのではないかと思います、農学科の中に土壌学がある農工大を選んだのは、もう何十年も昔のこと。しかし、就職するときは、農業の将来性に魅力を感じず、造園職として県職員になりました。でも、子供のころからの穴掘り好きのためか、やはり土いじりへの憧れは捨てきれず、就職後も農体験ができる場所を探し続けてきた私です。

初めに見つけたのは、山の中の昔の木造の小学校を改装したユースホステルに併設された畑でした。山に囲まれ、自然と共に暮らしている感じがするとても素敵な場所でした。ただ、ここへは車で片道1時間半ほどかかることから、もっと近い場所をと思い、ここで知り合った人が麓の畑を紹介してくれたので、そちらに移

りました。片道1時間となりましたが、それでも幾多の農地を通り越して行くのももう少し近い場所にならないかと思っていました。

その後、地元で休耕田を耕そうというボランティア団体が立ち上がったことを新聞で知りました。休耕田が増えてきた集落景観を嘆いて始まった活動です。まだまだ元気な高齢者が中心の団体で、定例の活動日が平日のため、私は年に数日しか参加できませんが、いつも温かく迎え入れてもらっています。自転車で20分ほどとぐっと身近になり、申し分ないのですが、たまにしか行かない私はお手伝い的なことしかできないのが悩みの種でした。

さて、ある時、「県職員のOBだが、農工大の同窓会のことで話がある」と電話がかかってきました。これが大きな転機となりました。同じ部の方でしたが、初めてお会いする方でした。この農工通信の原稿を頼まれた後、いろいろお話をしていると、なんと家がかなり近くだという事が分かりました。そして、私が「地元で休

耕田を耕す会に入っているのだが、お手伝い的な参加なのでもう少し主体的に畑仕事がやりたい」と言ったところ、「私が借りている畑の一角を使ってはどうか」という願ってもないお言葉をいただきました。初対面なのに同窓というだけでここまでしていただけるのかと感激し、後日、現地を見せてもらう約束をしました。そして、約束の日、現地に行ってみると、「とりあえずここを使ってもいいのだが、君も孫請けみたいなやり方では面白くないだろうから、他に借りられる畑がないか当たってみてあげるよ」とさらにありがたいお言葉をいただきました。めちゃくちゃうれしかったです。ついに念願が叶った思いでした。素晴らしい。農工大のOB会ってなんとありがたい組織なのだ。見ず知らずの人にここまでやってあげようと思わせる力はすごい。ありがとう、農工大OB会。



記念すべき第1号の枝豆

コラム<復興> 2

原子力発電所事故後の環境回復に関わる活動

眞田 幸尚 (環・資院 H12)

2011年3月に発生した原子力発電所事故から4年が経過し、私の福島での活動も4年が経過しました。現在、福島は少しずつ平穏を取り戻しつつありますが、残っている課題はまだ先の見えないものが多くあります。思い起こせば、農学部環境・資源学科から、高田秀重先生の紹介で日本原子力研究所の特別研究生にならせていただいたことがきっかけとなり、畑違いの原子力分野の研究者となり10年目、家族もでき家も購入し、落ち着いたところに事故が起きました。私の専門は放射線の計測で、原子力研究の王道ではありませんでしたが、事故が起きたことは大変驚き・戸惑いましたし、原子力分野に関わるものとして今でも痛恨の極みとしか言いようがありません。その直後、福島対応部署に異動となり、少しでも福島や日本のためにと身を粉にして活動してきました。

事故直後から実施してきたヘリコプターを用いた放射線の測定では、中心的な役割を果たさせていただき、事故の影響を可視化することで、住民の皆さんの不安を軽減するとともに自治体の除染計画の策定や環境中の放射性物質の移動の研究に役立ってきたと一定の評価をいただいています。その後、農薬散布で用いられる無人のヘリコプターや今話題のドローンにも放射線検出器を搭載し、被災地の除染前後の測定や発電所から5km圏内のモニタリング等に活用してきました。事故直後、発電所上空をフライトした際の津波の被害の甚大さは今でも忘れることができません。

原子力分野の人間関係には、同窓会の方は大変少ないのですが、農工大で同期に福島での活動で助けられました。空以外の仕事で、水中の放射線測定技術を開発していた2012年に福島県庁に就職した同期と福島市内で久しぶりにビールを傾けていたところ、農業用ため池底に蓄積した放射能の測定の問題を知り、同期経由で技術を担当部署に紹介してもらいました。それがきっかけとなり、開発していた技術が標準的な手法として採用され、現在でも被災地で活用されています。この時ほど、同期のありがたさや運命的なものを感じたことはありませんでした。

(<https://www.jaea.go.jp/02/press2014/p14070301/>)

前述した通り、発電所から100km離れた福島市や郡山市では概ね事故前の生活を取り戻しつつありますが、発電所周辺の避難指示区域では、現在でも住民は帰還できない状況となっています。それでも、事故直後人の手が入らず荒れ果てていた田畑は、現在では除染作業が進みきれいに整備されていますし、事故直後いたるところで見受けられた牛や豚やダチョウ等の家畜やペットは今では全く見なくなりました。発電所の敷地内も、がれきや津波に流された建物は片づけられかなり働きやすい環境になってきています。原子力関係者ということで何かと批判されることも多いですが、今後とも被災地のためになる研究開発に取り組んでいきたいと考えています。



左写真：左から2番目が筆者
右図：航空機モニタリングの結果例（規制庁HPより）

III. 手応えを感じる

1. ヤンマーミュージアム見学記 訪問記

川島 長治 (農 S39)

2012年、創業100周年を迎えた(株)ヤンマーは、その歩みを紹介するためヤンマーミュージアム(以下、YM)を滋賀県長浜市に開設した。館長が同窓の小林文博氏(昭50年、工学部機械工学科卒)で、氏の厚意によりYMを見学し、感銘を受けた幾つかを記したい。

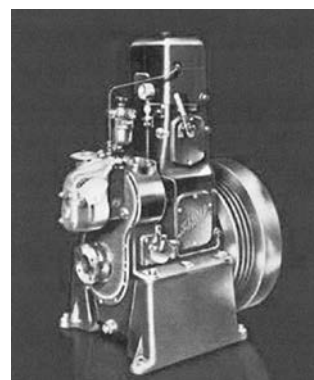
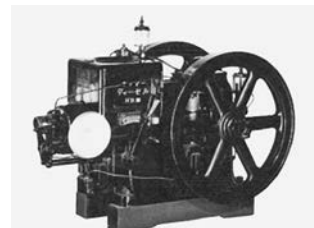
YM展示の年表について、HP上の100年史と照合しつつヤンマーおよび創業者山岡孫吉(以下、孫吉)の歩みを振り返ってみる。孫吉は1888年(明治21年)、滋賀県伊香郡東阿閉村(現長浜市高月町)で、水田2反歩を耕す忠二郎の9番目(6男)として生まれる。16歳の時、志して大阪に出、幾つか職を転々とした後、現大阪ガスの前身でガス配管の仕事などをする。

そこでガス発動機に出会い、それが孫吉の一生を決める。折しも、当時、紡績工業などの隆盛で原動機の需要が高まっていたが、石油発動機(以下、GE)に続いて電動機(EM)が発明されてGEは駆逐され、中古品が放置されつつあった。しかし、全国的には電力供給事情は悪く、停電も頻繁に起こりEMは安定した動力源ではなかった。孫吉は放置GEを回収し、その修理・販売を行いつつ、製造にも着手、それを初招り機と揚水機(バーチカルポンプ)の動力源とし、広く普及させた。しかし、GEには事故(時には人命に関わるほど)が多発した。そのような折、孫吉は1929年(昭4)、大阪で開かれた原動機博覧会に出品されていたディーゼルエンジン(以下、DE)に強い関心を抱いた。それはGEの事故とDEには事故の情報はなく、安価な軽油を燃料とするので経済性も高いと考えたためである。

ところで、DEは1892年(明25)にドイツ人・Rudolf Dieselによって発明され(発明者の名に因んでDiesel Engineと呼ばれるとのこと)、それを承けて現三菱重工などがDEの開発を進めていた。ただしそれらは大型(200PS級)であったので、孫

吉は10PS前後の小型機の開発を考えた。

これより先、昭和恐慌のあおりを受けた農業恐慌による業績の低迷や(農業機械の販売不振)、従業員との不和(株式会社化にともなう株の持ち合いを争点とする争議)などで不遇であった孫吉は欧米視察に出、ドイツ・ライプチヒのメッセ(見本市)で、世界最初のDEメーカーであるMAN社のDEに出会う(1932年)。しかし、それも大型でドイツ国中を探しても小型機は見つからず、自身で開発すべく意を決して帰国。強い決意と信念により、帰国後僅か1年5ヶ月の1933年(昭和8)、立形2サイクル5PSの試作機を続いて初の商品・立形4サイクルDD型(10~12PS)その他を開発し、DE事業の出発点となった。YMエントランスにDEの原型であるドイツMAN社のDEが隣接する孫吉記念室



に、小型(といってもかなり大きい)に改良されたDEが展示されている。なお、それらに続いて船舶用大型DEの開発を行うが、これには元海軍横須賀工廠造機部長近藤市郎少将や元海軍艦政本部横井元昭大佐の力が与っている。YMから筆者が得た感じでは、両人は孫吉の招きによってヤンマーの人となった(終戦後間もなく)ように思われて、その行動力に感銘を受けた。しかし、100年史によれば、近藤少将については旧海軍からの要請によったとのこと、いささか割り引かなければならなくなった(技術畑とはいえず少将のような高級将校は戦争責任を問われていたかも知れないし、職を失なって不遇であったとも思われる)。

ともあれ数々のDEを開発し、世界的DEメーカーとなる(ヤンマーの事業本体。農業機械は一部門)。

ともあれ数々のDEを開発し、世界的DEメーカーとなる(ヤンマーの事業本体。農業機械は一部門)。

その一部はヤンマー農機のトラクタ、コンバイン、田植え機に搭載されるほか、プレジャーボート・大型船舶などの動力源となっている。

青少年の技術習得のためのファンドを創設したり、故郷に部品工場を建設するなど利益を社会に還元することも行い、立志伝的な人物であるにせよ、経済的に未発達であった日本の工業化に重要な役割を果たした孫吉の洞察力、行動力、精神力は敬服に値する。

YMの展示のDEから考えるに、動力源としては水力（粉ひきや米つき）・風力（オランダの干拓地の排水）などの再生可能な自然資源の利用を第1世代とすれば、蒸気が第2世代（イギリスの羊毛工業などの産業革）、GEが第3世代（1900年前後フォード自動車）、電動機が第4世代DEはそれらに継ぐ第5世代ではなからうか。ヤンマー、元大阪金属工業（現ダイキン）とともに稲移植用の「苗播き機」の開発に当たった「神崎高級工機」も孫吉が作った会社であると知れたことや、会社名「ヤンマー」の由来、セレッソ大阪はヤンマーのサッカー部とのことも興味を覚えるが、詳細は字数の都合上、割愛せざるを得ない。なお、YMの展示から得た筆者の感想と案内者の説明。100年史の記述内容にそれぞれの主観による乖離があるのは残念である。

2. 次代につなぐ「からきだの道」

近藤 眞澄（化工 S48）

多摩ニュータウンに暮らして約40年。現在、居住している多摩市唐木田地区には18年前に移り住みました。自ら終の棲家と決めた地、ならば定年を機に社縁社会から離れ地域活動に関わろうと決心し、60歳定年を迎えた5年前、地域デビューを果たしました。地域のコミュニティセンターの立上げ・運営、都市農業の支援、多摩市民の健康づくり推進、市内の公園緑地管理などに参画してきましたが、今もっともアクティブに取り組んでいる「からきだの道の会」の活動について紹介します。

「からきだの道」は、多摩ニュータウン開発に伴う唐木田地区のまちづくりの一環として、昔の唐木田谷戸の面影も残しつつ、新しい街並みにとけこむように復元・整備された緑地です。面積は約5ha

と東京ドーム1個強ながら、ゴルフ場（府中CC）に接して東西に細長く、全長1.8kmの起伏に富んだ自然散策路を有しています。開園して20年近く経ち、生い茂った樹木で展望ポイントでの眺望が効かなくなったり、木製階段が傷んで歩きにくい箇所があったり、決して五つ星の散歩みちとは言えませんが、4年前、そうした事態を憂慮した地元有志が集まり「からきだの道の会」を発足。まずは自分たちができることから始めようと、市の公園緑地課とも連携しながら保全活動を続けています。

具体的には、雑木林の下草刈り、林床整備、間伐、剪定、植樹の他、散策路の点検・パトロール、枯木・倒木・落枝の処理、桜や梅など花木への施肥、植生調査、希少植物の保護観察などを行っています。また、竹林再生も兼ねて毎春に開催している親子で楽しめるタケノコ掘り体験会も地元の恒例行事として定着しつつあります。

とりわけ、唐木田地区のみどりの背景でもある「からきだの道」は、良好な景観形成や生物多様性の確保などの役割も担っていますが、喫緊の課題は雑木林全体の若返りを図ること。即ち、樹齢を重ねた樹木を伐採し、萌芽を育て、次世代の樹木へと世代交代させることです。そして、雑木林の中を明るくすることで、休眠していた草花だけでなく、もともと生息していた昆虫や野鳥、小動物などの回帰を図ります。これは一ボランティア団体では限界があるため、他の関連団体や市との協働の輪を広げ、年次計画を策定の上、順次実施していく予定です。

最後になりますが、2014年11月『からきだの道散策ガイド』を公益信託多摩まちづくりファンドの助成を受けて一万部発行し、近隣の自治会や商店、公共施設などに無償配布しました。この冊子は、単なる散策マップではなく、地域の成り立ちの一端を知り、地域の魅力の再発見、住む街への愛着を高めてもらうことを目的に制作。近隣の小中学校においてはESD（持続発展教育）の教材としても活用されています。この地域の未来を創造し、次代を担う人材育成に役立つことを願ってやみません。



3. めざましい女性の進出にエール！

田畑 正紀 (林 S55)

既にそのCMは番組から消え去ってしまいました。私にとってはCMの中で、朝から晩まで子育て、仕事、家事に追われて一日中動き回る「頑張るお母さん」の姿にぞっこん感動してしまいました。それは、きっと家内ともオーバーラップするのでしょうか。歳のせいか、涙腺がすっかり緩んでしまっているの、このCMを見る度にウルウルしてしまい、家内からは「どうしたの。お父さん……」失笑を買われてしまいます。大手食品メーカーのCMで、働くお母さんの1日を追ったものです。朝一番に起床して、朝ご飯を作って、お弁当を作って、幼子達の着替えをさせて、(お父さんは奥の方で何かしている?)、自転車の前後に二人の子供を乗せて、幼稚園(保育園かも)に送って、通勤電車で揺られてあくびをする、職場で打ち合わせしながら時計を見て「子供達、お弁当食べているかな」と気遣う……、仕事を終えて子供達を迎えに行き、自宅に帰って夕食の支度をして子供達と和やかに食事する、(お父さんは残業で?不在) 確かそんなシーンでした。

我が被災地宮城県では、復興現場の最前線でヘル



メット姿に作業服の出で立ちで、沢山の女性が働いていますし、工事現場を行き交う大型トラックにも女性運転手の姿は少なくありません。身近なところでは、郵便配達も宅急便も女性サービスドライバーが颯爽とバイクやトラックを横付けして、郵便物や荷物を元気よく届けてくれる光景が本当に多く見かけられるようになりました。

山好きな山ガール、居酒屋の暖簾をくぐる女子会、土木現場で働くけんせつ小町等々、社会のあらゆる場面で、めざましい女性の進出に目を見張るものがあります。我が同窓会支部総会にも、かつてはせいぜい一人か二人の女性しか参加されませんでした

たが、最近は大勢の女性が、しかも平成卒の女性に参加いただいています。懇親の場も一気に盛り上がり、二次会へ流れるのは極当たり前となった昨今の動静であります。

同窓会本部総会出席の折りに、母校を久しぶりに訪れると、キャンパスの変貌ぶりにびっくり。工学部の近代的な建物群や、農学部の荘厳なケヤキ並木から受けるインパクトは相当ですが、何よりも女子学生の姿が目立ち、地味さというか土臭さというかそういうかつての農工大のイメージが払拭されて、清楚で垢抜けしたように感じるのも、そのせいなのではないでしょうか。

少子化が進み、社会を支える人はこれからどうなっていくのでしょうか。冒頭で触れたCMの働くお母さんに象徴されるように、結婚して子供を持ち、夫と共に家計を支える女性達の負担を、我々男性がもっともっと手助けしてあげるべきと、世の女性の働く姿、将来を担う女子学生の姿に強く思ったのであります。地方創生には女性の存在と活躍、彼女たちの知恵と勇気が不可欠であり、女性が元気に生活している姿こそ、めざすべきところではないでしょうか。(宮城県支部長)

4. 勉強するのは今からでも遅くない

名知 宣博 (林 S61)

現在私は、岐阜県のコンクリート製ヒューム管メーカーに勤めています。また、岐阜大学工学部社会基盤工学の大学院生でもあります。仕事内容は、遠心力を利用したヒューム管やレジコンクリート(樹脂コンクリート)で出来たヒューム管やマンホールの製造販売をしております。大学では、コンクリート関連の研究を行っております。

岐阜大学では、社会人プログラムとして社会人の大学院生を受け入れています。高校の先輩がこの制度を利用し岐阜大学大学院に入学し、私にも勧めてくれた事がきっかけとなり私も入学を決めました。

入学試験も書類選考と面接のみでした、書類選考では、コンクリート製品の開発をしてきた今までの実績を強調しました。通常大学院は2年の課程ですが、私の場合は仕事と両立できるか不安であったため、最初から4年間の長期履修で申請しました。長期履修では授業料も通常年間535,800円のところ半

分の267,900円で、4年間の合計金額は同じになります。月22,000円とおこづかい程度の授業料です。当初は自分で支払うつもりでいましたが、会社が授業料を支払ってくれることになりました。入学の年は私の長男もちょうど大学1年生となり、息子と一緒に1年生でした。

大学院での授業は、多くて4人少ない時は2人で受けました。休むことも寝ることも出来ません。専門分野だけでなく、英語や倫理学等の一般教養もあり、コンクリート以外の社会基盤に関連すること、具体的には、安全工学、地震防災工学、海岸工学、環境リスク論、実践交通工学などです。後、特別応用研究として自分の仕事に関連する研究を在学中に3件行います。私は現在4年目です、授業の科目はほぼ履修が終わり、残すは特別応用研究1件となりました。2件はもう終了しました。初めに円形側溝用グレーチングの熱膨張によるせり上がりの防止、2件目は遠心力コンクリートの耐凍結融解試験でした。3件目は繊維補強材入りレジンコンクリートについて研究したいと思っております。最初の年はとても大変でした、金曜日の夜仕事が終わってから英語、土曜日は終日授業です。宿題等のレポートや課題もあり徹夜することも有りました。大変真面目に取り組み、自分で言うのもなんですが、農工大学時代とは比べものにならない位良い成績です。学生時代は時間に余裕もあったのですが、何故あんなに勉強をしなかったのでしょうか？不思議なくらいです。勉強するのに、遅すぎるとい事はないです。農工大学卒業生の皆さんも一度地元の大学で検討してみてくださいはどうか？

農工大学グルメツアー

毎年、昭和61年農学部林学科卒業の有志5～8人程度で2泊3日の旅行を企画し実行しております。今年は三重県伊勢神宮近辺の予定です。グルメツアーと言っても、旅館でみんな一緒の部屋で飲んで話をするだけなのですが。地元の友人にはなかなか言えない事も、このメンバーには正直に話が出来ます。私は毎年この旅行を非常に楽しみにしております。

みなさんは同窓会など開催してますか？

5. これは運命か!? 農工大での分かれ道

岩佐 秀明 (高工 H1)

私は今、出身北海道で経営コンサルタントをしている。仕事の多くは、地元企業と契約ないしは公的支援機関に委嘱され行う中小企業の経営支援業務である。

私は、私大受験のため東京に来て以来、東京で学びたかった。国立志望であったため東京農工大学を受験した。そして合格した。正直迷った。第1志望ではなかったから。

私は入学時、第2志望の高分子工学科が、正直どんな学科なのかわかっていなかった。1年次に学んだ「高分子の科学」の講義で、当時（昭和60年）でも重要な課題であった石油枯渇問題、CO₂の濃度の増加、食糧問題など地球的問題を解決する可能性のある分野と知った。これは夢がある。講義だけはまじめに出席した。よくわからなかったけれど。

転機は、2年次（昭和61年）の秋である。某全国紙の夕刊の特集で「北海道経済の沈没の危機」を読んだ時である。北海道は円高、内圧、外圧による炭鉱の閉山、減反、200カイリ時代の到来、造船・製鉄不況、北海道には未来がないのか？と書かれていた。それから悶々とした日々を過ごしていた。

高分子工学科の前身は製糸学科である。製糸学科には、工場の運営管理を担う人材育成のために工業経営管理学講座があった。昭和57年高分子工学科へ改組した後も加工管理工学講座として、工場経営に関する講義があった。東京農工大学工学部百年史によると、東京蚕講習所に製糸部が設置された明治35年には松下憲三郎教授が製糸業経営論を担っていたという、由緒ある流れをくんでいた。私は、3年次に工場経営に関するIE（生産工学）概論、生産管理概論などを学んだ。そして、この分野が私の進む道かと考え始めた。地球的問題解決を図ることも大切だが、まずは故郷の一助になりたい。研究室は、加工管理講座の松行康夫助教授（当時、平成2年に電子情報工学科教授昇任）にお世話になり、指導を受けた。

卒業後、松行先生の縁もあり、筑波大学大学院経営・政策科学研究科に進学、経営・経営工学、経済を学んだ。就職は工場の現場改善では定評があった(株)日本能率協会コンサルティングに入社し、現場改

善から企業再生まで約10年間お世話になった。

北海道は、私の志が不要となるほどバブル景気の波に乗りかけたが、バブルの破綻さらに北海道拓殖銀行破綻もあり、再度低調におちいった。私は、平成13年に北海道のある中小企業にUターン就職したが、その後中小企業診断士の資格も得たこともあり、フリーランスで開業し、現在に至っている。

今は、北海道の農産物や水産物を原料とした食品製造業、川上の農業機械製造業、食品製造業を支える食品加工機械製造業などの経営支援が多い。最近まで複数の酪農家が出資したチーズ工房（六次産業化のはしり）の人材育成をお手伝いしていた。1次産業の付加価値を高める仕事は、まさに農工大出身者らしいテーマと考えている。なお、そのうち地球的問題解決を図るベンチャー企業を支援したいとも思っている（笑）。

6. 和牛は日本の風土のたまもの

傍島 英雄（農 H4）

私は平成5年に岐阜県庁に入庁し、20年を超える勤務を続けております。岐阜県自慢のグルメとして皆さんの知るところとなった「飛騨牛」の研究を行う畜産研究所で研究員として（まさに）脂の乗った30代を過ぎました。「飛騨牛」のその豪華な霜降り肉は、飛騨高山を中心としたご当地のごちそうとして重要な観光資源となっています。その理由は一度食べていただければ問答無用ですが、私なりの講釈をお聞きいただければ幸いです。

飽食の時代に目の敵にされますが、霜降りのもとである脂肪分は古今東西のごちそうの一大要素であります。そのようなお肉がなぜ日本に生まれたのでしょうか？

和牛は、魏志倭人伝に沿えば「牛馬なし」の土地に渡来人とともに渡ってきて以来の日本在来家畜で、トラクターや軽トラがこれほどまでに普及するまでは、農作業の重要な担い手（役牛）として活躍していました。その牛がなぜ、世界にも誇る日本のごちそうとなったのか？私の考える仮説の1つが、その役牛としての特徴「働き者」であったことです。文献によると、明治維新以降の西洋技術導入は和牛にもおよび、明治～大正頃、和牛への外国種交雑がブームとなり、牛としては小柄だった和牛の体格の

向上に寄与したそうです。しかし、役牛としては動きが鈍く、従来の和牛を見直す契機となり、現在の黒毛和種としての品種確立につながったそうです。

よい和牛の評価として、皮膚が薄く、皮下脂肪が少ないことがあげられます。これは夏の炎天下でも、勤勉な農作業に耐えられるような選抜圧がかかっていたのではないのでしょうか。また餌の不足する冬期にそなえて、筋肉内に脂肪をため込む性質が有利に働いたのではないのでしょうか。最近の研究では、霜降り肉にかかわる遺伝子がいくつか発見されています。もし、霜降りが病的な突然変異であるなら、わずかな遺伝子でそれが説明できるはずが、実際は複数、それも10や20でなく何十という霜降り遺伝子の存在がわかってきています。多くの遺伝子が関与するという事は、それが和牛にとって有利な形質であったからと考えます。ごちそうとしての「飛騨牛」を取材してくれるテレビなどに、このような和牛の遺伝的背景や血統の重要性などを説明すると、たいがいバツサリとカットされ、「水と空気のおいしい岐阜で育った」あたりしか使用されません（それも真実です）が、同窓諸氏にはきっと面白がってもらえると思ひ筆をとりました。

もう数年前になりますが一度奇特な外国人がアポなしで熱心に話を聞きに来たことがあり、不思議に思っていたところ、直後にフランスの有名な観光ガイドに飛騨高山が三ツ星評価されました。もしやと思いその英語版を読んでみると、自分の説明がほんのごく僅かに引用されており、あれが噂の覆面かとビックリしたこともありました。



7. 報道パイロット

中村 知博（電情 H9）

私は農工大在学中、将来自分が新聞社に勤めるなど夢にも思いませんでしたが、現在、中日新聞社に



勤務しています。東海地方に縁のない方には馴染みのない会社でしょうが、そのような方でもプロ野球中日ドラゴンズの親会社といえればお分かり頂けると思います。私も入社するまで知りませんでした。関東地方では「東京新聞」という銘柄の新聞を発行しています。私はその航空部に所属し、6人しかいない操縦士の一人として働いています。私が勤務する東京ヘリポートにはヘリコプター1機のみ、主基地の名古屋空港に小型ジェット飛行機1機、ヘリ2機が配備されています。

私は97年に農工大を卒業し、旧運輸省航空大学校（航大）に進みました。当時、航大は年間百名弱の入学者がいましたが学生数の少ない農工大出身者はいないだろうと高を括っていました。ところが航大在学中4名の農工大出身者と出会うことになり、驚きました。訓練機が不時着に失敗し、その昼のNHKトップニュースとして報じられたこともありましたが何とか99年に卒業しました。

各航空会社が採用を絞っていたため就職はできませんでした。その後塾講師、郵便局の臨時職員、東京消防庁の消防士を経て、2001年に中日新聞社に入社しました。航大卒業時、飛行機（多発）事業用免許と計器飛行証明を取得しましたが、ヘリの免許は持っていませんでした。入社後5年間は仕事に必要な免許取得のため毎年のように航空局の試験を受けました。7年前、東京に異動してからは飛行機の乗務がめっきり減りましたが、自分が生まれ育った関東平野を懐かしむようにヘリで取材しています。

ヘリで仕事をするようになってから10年強、仕事を始めた頃に行った兵庫・福知山線脱線事故は狭い範囲に15機ほどのヘリが集まりドキドキしながら飛んでいた記憶を今でも覚えています。それ以上に鮮烈だったのは東日本大震災でした。南三陸町や陸前高田市に入ると本当に街があったのかと思うほどの光景でまるで映画の一場面を見ているかのようでした。

自ら取材した写真が朝刊1面に大きく載った時などはやりがいを感じますが、基本的に事件・事故取材だと地上で喜んでいる人はいないので心境的には複雑です。また、インターネットの普及により飛んでいる機体がどの所有か簡単に分かるので取材から帰ってくると本社や事務所に「うるさい!」、「何でうちの上ばかりを飛ぶ!」など苦情電話があることもしばしばです。そんな日は疲れが倍増します。

世間では航空会社のパイロット不足が謳われていますが、40歳を過ぎると機長資格が求められるので断念です。最近、いずれは世のため人のためになるドクターヘリの乗員として社会貢献できればと野望を抱いています。

8. 私と日本酒

和田(大山) 茂樹 (連農 H14)

東京農工大学農学部応用生物科学科平成5年度入学、櫛寮平成5年度入寮の大山茂樹改め和田茂樹と申します。大学卒業後は農学研究科、連合農学研究科と進み、修了後は出身地の沖縄県の県庁に奉職、その後大阪大学での研究員を経て、現在は山形県の和田酒造合資会社にて清酒「あら玉」、「大吟醸 名刀 月山丸」等の日本酒を造っております。

私の日本酒との出会いは大学時代にさかのぼります。櫛寮生だったこともあり、コンパ等がたくさんありました。もちろんその中で日本酒が出てくるわけですが、紙パックに入った日本酒を検尿採取のような紙コップになみなみ注がれ、軽快なコールによって飲み干し、いったん胃の中に入れたものを、地球に返すということを繰り返していました（現在はこのようなことはないのでしょうか?）。もともとアルコールは好きなので、飲んでいる時はまだよいのですが、次の日の頭痛、気持ち悪さは耐えられないものでした（そんな飲み方していたら当たり前ですね）。当時の私にとっては、日本酒はあまり良い印象がありませんでした。

そんな中で、3年次に醸造学研究室への配属が決まりました。研究室には山形県の酒蔵の娘さん（のちの私の奥さん）がいて、その実家から送ってもらったという日本酒を初めて飲ませていただいたとき、目からウロコ、「日本酒とはなんて美味しいのだろう!」と衝撃を受け、180度イメージが変わ

りました。

そのあと、なんだかんだありまして、平成18年より和田酒造で日本酒を造っております。日本酒造りに関しては、大学の講義等で少し勉強したくらいで、実際の現場を見るのも初めてで、逆に研究室で微生物を扱っていた経験からは驚くことばかりでした。すべて開放された環境での原料処理、製造作業、開放されたタンクで雑菌の汚染なく純粋な日本酒ができること等々…。日本酒の醸造の初期には乳酸による雑菌の淘汰（この乳酸自体を乳酸菌に造らせる方法が生酛仕込・山廃仕込と呼ばれます）、乳酸酸性に耐性のある清酒酵母の増殖、麹菌の作る酵素による米のでんぷんの糖化、酵母による醗酵で糖をアルコールと炭酸ガスの生成。日本が誇る並行副醗酵の過程を見ていると、本当に微生物の神秘、古人の知恵に驚かされます。夜中に蔵を見回るとき、醗酵中のタンクをのぞき込むとそのまま時が経つのも忘れて眺め続けてしまいます。同じ理系の皆様にはご理解いただけるものと思います。

ここ3年ほど、冬の酒造りの季節に県外からも樺寮の友人・先輩方を中心に多くの農工大同窓生が酒蔵見学に来てくださいます。日本酒と酒蔵を通じて、再会できることが大変うれしく、感謝しております。また、多くの方々にこの美しいトラディショナルバイオテクノロジーを感じていただきたく、予約制とはなりますが、冬の酒造りの時期を中心に蔵見学も受け付けております。お近くへお越しの際は是非、遊びにいらしてください。



※広告（P50）もご覧ください

9. 白山麓で地域と野生動物問題に向き合いたい

有本 勲（連農 H24）

私は2002年に農学部地域生態システム学科に入学

し、森林生物保全学研究室で2005年から3年間、富山県に泊まり込んでツキノワグマの生態調査に取り組みました。クマを罠で捕まえ、発信機を装着し、クマの生活痕跡を求めて森の中を歩きまわる日々。クマの不思議な魅力の虜となりました。その後は、北海道でのヒグマ調査を経て、2009年に農工大に戻り、東京都奥多摩町で3年間クマの生態を追いました。

そして、2011年4月、石川県白山自然保護センターへの就職を機に石川県へやってきました。石川では、クマの出没増化、サル・イノシシによる農業被害の拡大、さらには農林業・自然へ甚大な被害を及ぼすニホンジカも増えています。私は、自動撮影カメラ（カメラの前を通った野生動物を自動的に撮影する装置）を用いた調査などによって、これらの大型哺乳類が増加していることを明らかにしました。しかし、県の予算が限られていることなどにより、専門家の先生の提案通りにはなかなか対策が進まない。次第に、自分は何のために大変な思いをして調査をしているのだろうというジレンマを抱えるようになりました。そして、新しいこと、面白いことをスピーディーにやるには、民間、それもなるべく規模の小さい民間がよいと考えるようになりました。

そんな時に、出会ったのが「一般社団法人白山ふもと会」でした。当会は、石川県白山市の白山麓旧5村の観光協会が地域活性化を目的に組織した団体で、主に特産品の開発・販売や、捕獲されたイノシシの食肉処理・販売をしており、常勤職員は1名だけでした。ふもと会が開催したイノシシ解体教室に参加したりする中で、ふもと会の方々の非常に高いチャレンジ精神を感じ、ここなら自分のやりたいことができると思い、2014年8月、自然保護センターを辞めてふもと会へ入りました。

ふもと会に入ってから、毎朝の事務所掃除に始まり、特産品の配達や有害捕獲されたイノシシの搬入、食肉処理、イベント出店など、これまでとは別世界です。これらの業務を通して、地元の農家や猟友会、料理人など多くの方々とつながりができ、その中で、本気で野生動物問題を解決したいと思ったら、中山間の地域活性化が必要だと考えるようになりました。白山麓でも過疎高齢化が進み人口が急速に減っています。行政や研究者が立派な計画を立てたところで、例えば獣害の最前線である中山間地域において環境整備や捕獲の担い手となる住民がい

なくては、計画は絵に描いた餅になります。山で生活する人が減れば、山がシカに食い荒らされたことに気づく人や行政に対策を要望できる人もいなくなるでしょう。そこで、今、ふもと会では地域住民である会員が集まり地域活性化策を検討すること、それによって若者の雇用・定住を促す対策に取り組んでいます。大学で学んだ野生動物管理を実現できるかどうか、この地を舞台に挑戦中です。



白山ふもと会に搬入されたイノシシ

コラム<海外> 1

農工大とLampung大学との交流の発展を！

Bainah sari dewi (インドネシア/連農 H21)

こんにちは、私の名前はバイナサリデウイです。

I have graduated from Tokyo University of Agriculture and Technology (TUAT) in Forestry Department 2005-2009 at Kengo Furubayashi Sensei's Laboratory (Wildlife Conservation). After graduated, I returned to Indonesia as a lecturer in Lampung University, Faculty of Agriculture, Forestry Department. Lampung University has been signing the Memorandum of Understanding (MoU) with TUAT. It is signed by the president of Lampung University and TUAT in 2008.

I am a secretary and permanent associate professor in Forest Department of Lampung University, and I am teaching about forest resources environment and wildlife conservation. As for forest resources environment, Lampung has two National Park, way Kambas and Bukit Barisan Selatan. And as for wildlife conservation, Lampung has endangered animals such as Sumatran Elephant and Sumatran Rhino. That why I take my concern on it and conclude it as my target research. I am also taking part in Indonesia Alumnus of Forestry Association (PERSAKI) as a general secretary. PERSAKI is an association belong to people who have already graduated from Forestry in Indonesia.

Since 2011, There were several students of Lampung University that have been participating in Short Term Exchange Program (STEP) at TUAT. The students are Mr. Eko Prasetyo in 2011, Mr. Dian Shandy Utama and Ms. Leony Delta Ellanita in 2012, and Ms. Desis Kurniati in 2013. There are also 2 students will join this program and come to TUAT this year (2014), they are Ms. Tety Maryenti and Ms. Chintia Tandoyo.

Regarding to MoU between Lampung University and TUAT. Lampung University has also an opportunity to do researcher/ lecturer exchange. That is my opportunity to get back to TUAT as an exchange researcher. I really interest to participate in that program. I hope I can get some opportunities to come to TUAT again. I love that campus very much, because they have very good facilities to study, including online digital journal access, and I could have chance to learn from excellent lecturer in TUAT. TUAT also gave me a huge energy to support my country to develop and improve better in future.

In 2013-2014, I contributed to be a local facilitator of JICA project as following items: (1) I facilitated people to improve development of wood industry in Small Diameter Logs (SDL) processing, (2) collected success story person regarding to small scale of wood diameter logs in Lampung province and other provinces, (3) facilitated Farmer Group of MAKMUR in East Lampung to get Timber Legality Certification (SVLK License). These activities are new target research for me.

As I realized that the MoU has been some opportunities to come to TUAT as an exchange researcher, I challenge my self to get this opportunity. and I hope TUAT can facilitate their alumnus, especially alumnus from Lampung University to exchange research and knowledge. I hope TUAT more develop and active for forestry research sector in the world.

And finally, I hope you are always in good condition, healthy, and happiness.

どうもありがとうございました。



IV. 学びを極める

1. 研究・開発に携わる皆さんへ

吉田 茂昭 (織化 S35)

昭和35年4月、理研光学(株) (現、リコー) に入社、約20年間研究開発部門で仕事をし、新製品の開発、商品化を通じて私の考え、感じた事についていくつか述べてみたいと思います。

1. 発明発見とか研究・開発は山登りに似ている。1つの山に登ると、もう1つの山が見えてくる。その山を超えるとまた次の山が見えてくる。2つ目の山に登らない人には決して、3つ目の山を見ることが出来ないのである。
2. 常識をもとにいくら議論を重ねても、常識的なもの以上のものは出てこない、誰が議論しても同じ結論になるからである。
3. 化学者は手品師 - 化学というのは化ける学問で、みんながあっとおどろくものを見つけ、見せるものだと思う。それは手品師と同じでみんなの気の付かない「種」を見つけ出すこと、創り出すことである。ここに化学の面白さがある。
4. 人には何か現象が現れた時あるいは結果が出た時、いい点に目がいく人と悪い点に目のいく人がいる。すぐ悪い点に目のいく人には何を頼んでもうまくいったためしがない。すぐいい点に目のいく人は、もし絶体絶命の悪い結果が出た時でも、なぜ悪い結果になったのかを追求し、何とかいい結果にもっていかうとする。この前向きな姿勢が新たな発明発見を生み、成功に導くのだと思う。私はいい点に目のいく人をプラス人間、そうでない人をマイナス人間と呼んでいる。
5. 困難な問題の解決に必要なのは知識、経験、気である、どれが欠けてもだめであるが、特に「気」、何とかしようとする「気」が重要である。この3つがそろえば、「勘」、「ひらめき」が働くようになり、新しい発明発見のチャンスが生まれる。問題解決につながる「勘」、「ひらめき」が働いてこそ、その道のプロである。

6. 自分の新製品アイデアを部下に実現させようとしている人がいるが、これは間違いである。達成見通しのない個人的に興味のあるアイデアほど、他の人がこれを可能にするのはむずかしい。もともと出来そうにない事をなんとか発明発見に結び付けようとするのは、自分が提案したアイデアであればこそである。うまくいくはずがないと思っている人にその実現を託しても、それは無理というものである。
7. うまくいって欲しいと念願して仕事を進める人には、それが成功する確率が非常に高まる。もしうまくいかなくても、それを何とかしようとするからである。仕事をする前から、これはダメだと思っている人に成功はありえない。やっぱりダメだという結果が出るからである。そして、それ以上何とかしようとしなさい。
8. 人の考えること、気の付くことは人によってそう変わらない。そのことを考え、研究していくと殆ど同じところに到達する。従って、早く着手すればするほど、それだけ早く新しい発明発見に到達する。

以上の内容は私の定年退職の時に「雑感—私の物の見方、考え方—」と題する小冊子一部を抜粋したものです。何とか一つでも同感してもらえれば、幸いです。

東京農工大学の先生方、在学生、そして卒業生の皆さんの益々のご活躍を祈っております。



2. (目標達成) - (現状) = (努力)??

杉浦 猛雄 (織化 S38)

新入生が入学して9か月、新年の声と共に、自分の目標も明確になって来た時期だろう。

直感で友達や他人のお勧めをキャッチ出来るスマ

ホ環境やビッグデータを試行錯誤した分析環境で、課題の選択や戦術作成が可能だと雖も、新規研究分野創造や成果の完成度レベルには、現状では、優れた知識や戦略が大きく左右する。

卒業した年の初秋、ラジオで、飛行機の糸川博士が或る課題を計画し実行完了する期限を7年制に定めて行く話を耳にしたのを、一寸アミーバ的で落下傘的ではないと少々抵抗はあったが、強く興味を惹かれ、色（色材）に関わる仕事を生涯の仕事にして行こうと定めたのが、約55年前だった。自分では、一つひとつの課題内容が異なるだろうと、完結期間を、夫々5～10年の何年間とした。都度、新規研究分野の課題概略を描き、国内外の大学や同様の研究機能を保有する大手企業と初対面の時に話をした。どの時も快諾され、お好きな様に進めてだった。そこに一番合った方法で立案。設定予定期間より短く完成した（min.3.5y）件や、事業としては早過ぎて立ち上がりの期間が長かったが、一旦動き出すと大産業に成り、初期計画の再構築をして、長く掛かった（max.16y）件も有った。しかし、幸い全てが完了して、概ね、 $55y \div 6 \approx 9.2y$ /件。

この過程で、常に、知識、経験、人脈、歴史感、研究分野、等々が広がって行くのを、肌で実感出来て楽しさ一杯の半世紀である。

現在は、協力して呉れた人達が集まる幾つかの同窓会に誘われ、年を経るとどの同窓会も人生を語る様な傾向。楽しく勉強になる。

Textiles of Art-Historical Importance（主に、Turkoman Rugs）に使用の色材超微量分析の関わりで、London某教会の埃まみれの法衣に染色されている色素の分析をしている時、South Americaにしか存在しない植物染料を見出した。15C. 以前の布と分かって居たので、その存在理由が不明。当時、地元英国Bristol市、Clifton Suspension BridgeのJohn Cabot親子の像を見て分かった事は、1492年Columbusはアメリカ大陸に上陸せず、Caribbean Seaの島嶼に辿り着いただけなので、この植物色素を持って帰ることは出来なかった筈。同時期、Bristol Channelから出港してアメリカ大陸に上陸したのはJohn Cabot親子等であり、彼らが持ち帰ったと断定した。彼らは黒人奴隷貿易や麻薬貿易をしていたので歴史上には出て来なかったのだ。

横道から戻して、結論的にいうと、研究開発企画完了には、広い視野の戦略と戦術、デジタルとアナ

ログを駆使して、忍耐では無くときめきを楽しめるかどうかだろう。

（目標達成）－（現状）＝（ときめき）

別な言葉では、他人がしない事をする、一人荒野に行く、やる気、希望、忍耐、本人がときめきを感じ続けられるかである。この時に、Adrenaline類が分泌されていると信じる。

提出者：Dr Takeo Sugiura

TUAT 繊維化学科卒

UOB Ph. D.

Mail: sugiurat@aurora.ocn.ne.jp

3. 安全作業とわが人生

上野 徳也（農工 S39）

昭和39年農業生産工学第1号卒業証書を頂き、農業機械メーカーに就職、2か月の新入社員研修、高尾山での1週間の刈払機作業実習を体験、九州・関東・東北と実演行脚、その後、秋田・ブラジル・東京・大阪・九州・メキシコと13回の転居生活、帰国後は関係先や農林業関連機関・国際協力事業団等で安全作業の普及に携わりました。

いつの時代も、新しい技術が生まれると新しいリスクが発生します。又、災害や事故は、不自然な環境の中で不安全な状態と不安全な行動が重なって起こると言われております。

今年もある大学山岳部の八ッ岳冬山行で、若い女子大生がリーダーと共に命を落としました。何故、集団で一緒に行動しないのか。大切なことは一番低い技術レベルの人間に合わせて集団で行動することです。

昨今は産業界ばかりでなく、小売業や福祉施設、飲食店などでも多くの事故が発生しております。その原因の多くは、ゆとり教育時代に育った人々の経験不足と高齢者の増加にあります。

農林業では、「鎌は七度（ななたび）向かう」の例えのとおり、事故が起こる時間帯は、始業・休憩・昼食・終業前後で、原因の多くは夜型生活から来る寝不足と疲労からくる身のこなしの鈍さにあります。

海外でも事故は起きております。先進国では1件でも事故が起きると、「安全」を社会システムの担保とし、徹底的にコストをつぎ込みます。

発展途上国では、その国の文明の進歩と人件費の高騰に比例して文明の利器が拡大してゆきます。ブラジルでは、1台の機械を何人も人間が交代しながら作業をするので、使用過多からくる事故を経験しました。メキシコでは、ワンダーフォーゲル部でご指導を頂いた川村先生がアルゼンチンでの学会の帰りに立ち寄られ、傾斜が45度もあるピラミッドを軽々と登られるのでその秘訣をお尋ねしたところ「膝を内側に向け、足の親指に力を入れて登ること」と承り、これぞ傾斜地作業の真髄と理解しました。

若き同窓生のみなさん。農林業での「安全第一」は服装とその時の作業姿勢にあります。どんな作業でも定められた規則があるので、取扱説明書を熟読し、手抜きをしないで、正しい作業を行うことが何よりも大切であります。

農林業作業は段取り8割と言われております。現場・現物を確認し、現実を見極めて計画を立てるようにします。事故や災害のない職場には必ず良き指導者がおります。20代に多くの知識と技術を会得し、30代に技能を磨き、仕事のコツを掴んで下さい。

安全作業のABCは、A=あたり前のことを、B=ほんやりしないで、C=ちゃんとやることであります。

シニアの皆さんは今まで自分が習得してきた技術や技能を生かせる機会を作り出す努力をすると同時に、ちょっとした勘違いや誤作動が大きな事故を引き起こす時があるので、常にブレーキとアクセルの踏み違えに留意します。とはいえ、身体の衰えはいかんともしがたいので、人間はミスをする者、機械は故障する物ということを前提に安全を確保し、2つ以上の動作を連動させた対策を講じ、身体が自然に対応するように習慣づけます。

青信号は「進め」ではなく、左右を確認してから「進んでもいい」ということであります。

分からないことは素直に孫に教わり、余計な口出しをしないで、身体を鍛え、数年先に目標をおいて、「明るく元気に」もう少しがんばってゆこうではありませんか。

4. 人工降雨と黄砂・口蹄疫の研究推進

真木 太一 (農 S41)

本課題を記述する前に若干の背景を述べておきた

い。農工大では黒部隆先生の土壌学研究室でトマトの栽培密度による気象反応を卒論とし、九州大・大学院では農業気象学を専攻した。修士修了後、農林省に入り農技研(南極越冬隊員)、農環研、四国農試、熱研セ、農研セ、農環研、愛媛大、九州大、琉球大、筑波大で研究を行った。九大では6年間だったが日本農学賞・読売農学賞、紫綬褒章(農業気象学研究)の受章もあり名誉教授(農水省・他大学での年数換算)となった。現在、2015年3月までは国際農林水産業研究センター特任研究主査であるが、いよいよ終わりである。内閣府日本学術会議会員(農学委員長等)6年を経て、現在は連携会員である。学会では日本農業気象学会・日本農業工学会・日本沙漠学会の各学会長、日本生物環境工学会での貢献などで名誉会員3学会、名誉顧問1学会となっている。ついでに1967~1971年に第11次南極観測越冬隊員で極高気圧の生成・構造、カタバ風、気候特性等の研究を行い10論文書いたが、オゾンホールが発見には至らなかった。

最近の科研費(基盤研究A)で、黄砂と口蹄疫(2006.4~2011.3)、人工降雨(2011.4~2014.3)を実施したが、最近の方から記述する。

人工降雨法には、①ヨウ化銀法、②ドライアイス法、③液体炭酸法、④散水法がある。それぞれ、ヨウ化銀、ドライアイス、液体炭酸、真水・塩水を航空機から散布する方法である。①のヨウ化銀は毒性があり環境に悪く降水効率が低い。②も効率が低い。④は熱帯で可能性があるが効率も余り高くなく実験例が少ない。我々5人の研究グループでは液体炭酸法を推奨している。これは、故福田矩彦ユタ大学名誉教授の開発であるが、実験例が少なく、世界に普及していないため、まずは実験の条件の解明と成功率の向上を目指した。航空機でサイホン式ボンベから液体のまま雲の底層付近に約5g/sで散布すると、自然の上昇気流および氷晶と過冷却水滴との結合で発生する潜熱による上昇気流とで、多数の氷晶が雲の中を上昇して30分程度で雲頂に達し、3次元的に拡散し、一層周辺の過冷却水滴と結合して、やがて雪片から雨滴になって地上に達する人工降雨・降雪の原理である。なお、人工降雨は雲による日射遮断と降雨による気温低下で地球温暖化とは無縁である。

液体炭酸の航空機散布実験で、私が直接関与した実験、東京都三宅島・御蔵島、名古屋南方大王崎沖、

秋田県沖（自衛隊機利用で防衛大学校遠峰先生が主動）、愛媛県西条市－徳島県三好市、佐賀県唐津市－福岡県北九州市では、7戦全勝であり一層自信を深めた。この内、名古屋南方大王崎沖でのNHKのチャーター機を利用した実験状況は「ためしてガッテン」（2013年7月3日）で放映された。その他、福岡・佐賀・長崎・山口でも成功している。本法は従来の人工降雨法より10～100倍の降水量・水資源が得られる。従来法では、よほどのこと（国家の威信をかけた北京オリンピックなど）がない限り、採算に合わないが、液体炭酸法では十分可能と判断される。大いに世界の沙漠・乾燥地、干ばつ気象災害時等に普及していきたいと思っている。興味のある方は、真木太一ら『人工降雨』技報堂出版、2012年を参照されたい。

次に、黄砂と口蹄疫であるが、科研費で実施期間中の最大関心事は2010年3～7月の宮崎県での口蹄疫による約30万頭の家畜殺処分であり、その伝播原因は黄砂であるとの推論である。折しも日本学術会議風送大気物質問題分科会では「黄砂・越境大気汚染物質の地球規模循環の解明とその影響対策」を2010年2月25日に発出し、農水省・環境省に手交した際に中国で口蹄疫が発生しているので注意を喚起したところであったが、見事というか、極めて残念なことに、3月25日の中国山西省での牛のO型口蹄疫、その翌日3月26日の宮崎での水牛のO型口蹄疫の発生であった（山西省－宮崎間は黄砂・風速による1日間差の飛来距離）。この伝播原因は3月16日、21日の黄砂（潜伏期間込み）であると結論付けた。理由は、中国甘粛省での豚口蹄疫発生と宮崎間の黄砂輸送距離・時間との一致、宮崎の気候的・地形的黄砂発生条件の特徴、また口蹄疫ウイルスは黄砂発生直前の降雨および黄砂輸送中の上空での高湿条件と石膏の反応例からも乾燥の問題はなく、黄砂凹部付着で紫外線も問題なく、低温が問題ないので、輸送期間2日程度であれば、生存飛来することが可能である。また、宮崎での黄砂着地直前での降雨、宮崎への気流の後方追跡法による甘粛省の特定・一致、福岡・沖縄・つくばでの採取黄砂中の口蹄疫ウイルスの遺伝子解析による同定も後押し情報であった。黄砂が納豆菌や枯草菌等を運ぶが同様の現象である。ただし、重要なことは確率の低い各現象が繋がっていることを証明したことであり、しばしば起こることではないことを理解して欲しい。

なお、農水省・宮崎県の報告書では進入経路不明である。さらには2000年の宮崎県での口蹄疫も黄砂輸送を提示しているが、これについても農水省の報告書では不明である。詳しくは、真木太一『黄砂と口蹄疫』（技報堂出版、2012年発刊）などを参照されたい。

以上のように、人工降雨・黄砂・口蹄疫の研究は世界の水不足解消および家畜伝染病抑制で重要であり、一層研究の推進を図る必要があると思っている。

昨年は宮崎県獣医師会等、本年2、3月と酪農学園大、東京都中野区で講演するが、人工降雨・黄砂・口蹄疫の情報提供には吝かでないと思っている。請うご期待！

5. 拙著「日本の戦略的思考—歴史から学ぶそのミクロ性とマクロ性」 「創造への序章」について

石川 泰弘（製糸 S41）

同書は日本人の思考方法について歴史的に遡って考察したものである。

思考力には国の運営、ビジョンに関する概念、思想のようなマクロ思考と、各個人に付帯する個別の技術力のようなミクロ思考とがある。日本是个々の技術開発のようなミクロ思考はもともと伝統的に強く、大いに発達し世界的に見てもトップクラスになったが、マクロ思考は不足している。近現代の日本は、欧米先進国をフォローし、追いつき追い越せと懸命に努力し奇跡的な成長を遂げ、経済大国といわれるまでになった。しかし、フロントランナーに立ってみると、世界に向かって大きなビジョンや方向性のようなマクロ性を示さなければならないが、充分には示せていない。近現代の日本ではいつも何らかの先導役それも概念、思想、ビジョンといったマクロ要素に依ってくれる先達が外にいた。多くの場合それは欧米であった。

日本では例えば戦後の技術の分野でも画期的なものには、カーボンナノチューブ（飯島澄男）、青色発光ダイオード（中村修二）、光ファイバー（西澤潤一）、光触媒（藤島昭）、導電性プラスチック（白川英樹）、フラッシュメモリー（舛岡富士雄）、PAN系炭素繊維（進藤昭男）、超極細繊維（岡本三宣）、リチウムイオン二次電池（吉野彰）などが

あるがこれらはノーベル賞になったものを含め世界レベルを抜いているが内容はシステムより素材、部品のようなミクロに偏っている。

このミクロ思考は明治から始まっている。開国したことによってマクロ思考部分（思想、概念、科学や民主主義、憲法、学校制度、軍隊制度などの制度）を欧米から輸入した。しかし、マクロ部分の輸入先では国、民族の長い歴史があって、その社会における経験に基づいたマクロ要素として生みだされている。ところができあがったものを輸入するとそのマクロの経験部分を喪失する。またマクロは戦略であり、ミクロは戦術として現れるので近現代の日本では戦時にその影響が現れた。日露戦争が戦略的であり太平洋戦争が戦略的でなかった理由でもある。日露戦時のトップの指導者層は幕末生まれであり、太平洋戦争時の指導者は明治初期の生まれであることと関係する。明治開国時の指導者は幕末江戸人であり、この人々は明治後半まで生きて明治を指導し、日露戦争時も指導し戦略的であった。日露戦では大国ロシアに対して戦況が有利な状態でいかに停戦に持ち込むかに腐心し何とかたどり着いている。一方太平洋戦争時のトップの指導者は新生明治国家のマクロ喪失時代に育てられた世代であり、どのように停戦に持ち込むかを考えていたとは言えない。

またマクロ喪失は無思想性状況も生むので、方向性が見えない状況を生む。

ところで歴史的観点から時代を遡ってゆくと江戸時代は鎖国をしていたので、日本の歴史のなかで唯一マクロ部分もミクロ部分も自前で生み出さなければならない時代だったので日本産の大思想家も輩出した。それゆえ江戸幕末人であった日露戦指導者の方が開国後の明治人である太平洋戦指導者より戦略的であるという逆転現象が起こっている。

6. 「日本語の科学が世界を変える」 松尾義之著を読んで

石渡 荘介 (化工 S48)

著者の松尾氏は農工大S50応物卒で日経サイエンスの副編集長を務めた科学ジャーナリストである。日本人のノーベル賞受賞科学者が輩出していることが、日本の国際化、グローバル化によるものでなく、むしろ日本語の思考によることを明らかにしようと

この本を書いている。

本は江戸時代の蘭学から始まる先人による翻訳で、哲学から医学までほとんどの学問が日本語で学べる環境が日本に構築されてきた。科学もその例にもれず、ノーベル賞受賞者も日本語で学んでいる。

著者はそればかりか科学研究が日本語による思考であったことからすばらしい成果が出来たことを明らかにしようとした。始めに日本語が理論的でないという迷信を打破し、日本人として初めてのノーベル賞科学者湯川秀樹の中間子理論は日本文化の二者択一でなく間のところをとる慣習によるのではないかと。そして言語だけでなく東洋の中庸思想の考え方が想像力を刺激しているとしている。これは宗教世界にも言えることであると。西洋世界の一神教であるキリスト教と違って日本の八百万の神は、多神教どころかすべての動植物からモノまでに神聖をみる感情がいろいろな可能性を考えるうえで本当に有効であるとしている。

これらのことは科学の課題の思考に自由な展開を与えていることをいろいろな事例から明らかにしている。日本人の生物学者の理論が西洋における宗教と科学の対立の一つであるダーウィンの進化論の呪縛から解放したことを述べている。これは木村資生博士の「分子進化の中立説」が「自然淘汰とは無関係な中立の突然変異が重要であって、その偶然的な浮動が分子レベルにおける進化の主役を演じている」と進化論を否定した。次は山中伸弥博士たちによるヒトiPS細胞が実現したときの話しである。ローマ教皇庁による発表が「難病治療につながる技術について受精卵を破壊する過程を経ずに行えることになったことを賞賛する」として、山中博士の業績を絶賛したのであると。これは日本ではすべての生き物にやどる命が意識されているが西欧文化では人間という存在を、他の動植物から別格扱いしているためであると著者は説明している。

日本語の科学がいかに素晴らしいかを数多くの日本人の科学者の業績から述べているが、著者の科学ジャーナリストという仕事の立場から、現代世界の科学進歩が停滞していると見ているのである。この停滞を救うのは欧米人に比べてより自由に創発出来る言語を持って、また宗教的束縛の少ない宗教観を持つ、日本語で考える人々であると述べている。もちろんこの人々は日本人とは限らないのである。

大学教育において自国の言語ですべての学部の授

業ができる国は欧米以外では日本だけである。東南アジア諸国はもちろん、中国も韓国もすべての学部において自国の言語だけで授業はできない。特に工学・理学系はそうである。最初に書いたように日本は哲学から医学まで日本語で授業が出来るのである。

私は、先進国で停滞しているのは科学技術だけとは思えない。経済学も、社会学も、哲学さえもそうでないかと思っている。新興国の目覚ましい経済発展と先進国の経済的停滞は誰の目にも明らかである。しかし、地球上の全ての国々が今の先進国と同じような生活レベルに到達できるとは到底考えられない。

地球の資源は人類、皆を豊かにするには少なすぎるのである。この課題の解決には本当に劃期的な科学技術が必要であるが、科学技術だけでは荷が重すぎるのである。哲学から経済学からすべての学術・芸術を総動員しなければならないと考える。幸運にも人類は言語体系の異なるふたつの学術・芸術の総体系を持っているのです。もちろんそれは欧米言語系の学術・芸術の体系と日本語系の学術・芸術の体系である。この二つの学術・芸術の体系は互いに競い合い、刺激しあい人類の永続的な存続のために貢献してゆかねばならないと思う。

7. 21世紀は「農」の時代 (その1)

横本 正樹 (農 S48)

1. 20世紀の農業は砂漠化への道

欧米の農業は、歴史始まって以来「プランテーション農業」であり、ギリシア・ローマの時代から農奴無くしては成り立たない農業でした。(プランテーションとは、大規模工場生産の方式を取り入れて、熱帯・亜熱帯地域の広大な農地に大量の資本を投入し、先住民や黒人奴隷などの安価な労働力を使って単一作物を大量に栽培する大規模農園のことである。Wikipedia)

戦争に勝つと捕虜を奴隷として使役して労働の部分を担わせ、勝者はその上にあぐらをかいて勝利の果実を味わうことができました。ローマ帝国が滅んだ原因も、単一作物の連続栽培で耕地が荒れたことに加え、帝国の範囲が広くなりすぎて農奴の供給が追いつかなかった事が主因であろうと、私は考えて

います。

現代の欧米の農業のあり方も、基本的にはローマ帝国の時代と変わりはありません。第二次大戦後広大な植民地を失った欧州だけは、食料生産の必要に迫られて家族農業に回帰し、食料増産に努めましたが、かつて植民地であったアメリカ・オーストラリア・カナダ・ブラジルなどは、プランテーションを更に押し進め農産物の大輸出国となっていきました。かつて農奴が担っていた作業の大部分を機械が行ってくれるようになりはしましたが、人手を要する部分がなくなった訳ではなく、その部分は雇用した農業労働者(主として移民)が携わっており、農業経営と農作業とはハッキリ分離されています。ヨーロッパ諸国のプランテーションは、植民地支配の一環でしたから、あくまでも「効率的な収奪」を目的とする採算性を最重視した経済活動の域を出ることはありませんでした。単一作物の大規模栽培は、自然からの効率的な収奪を目的としています。光合成に必要なものは、水と日光と空気(二酸化炭素)であることを、私たちは小学校の時に学んでいます。小麦とトウモロコシは比較的乾燥に強い作物ですが、これらとて適度な水がなければ生育することはできません。アメリカのように地下水を利用するか、ブラジル・オーストラリアなどのように降雨に期待するしかないのです。しかし、地下水の深度はますます深くなっており、森林を伐採して耕地にしたため、降雨量はますます少なくなっています。要は、プランテーションは持続可能な農業ではなく、僅か100年の間に咲いた徒花と言っても良いかもしれません。現在の世界の穀倉地帯がいつ砂漠化してしまうのか、誰もそれを知りませんが、そう遠い将来でないことは確実です。

ちなみに、家族農業に回帰したヨーロッパ諸国はいずれも自給率100%近くを達成していますが、皆さんはこのことを不思議だと思いませんか? 先進国で農業をしようとするれば、当然その国民の生活水準は高いのですから、それに見合った収入がなければなりません。しかし、国際価格はプランテーションで生産される安価な作物価格によって決定されますから、とてもその価格では先進国で生活していくことはできないのです。要は、ヨーロッパの農家が受け取っているのは、国際価格との差額を税金で補てんしている価格なのです。例えば、フランスで作った小麦の価格と国際価格とでは2倍以上の差が

あります。そこでフランス政府はその差額分を税金で補てんして国際価格と同じにしています。同じ値段になれば、よほどの理由がなければ消費者は国産を選びます。先進国で食料自給率を高めようと思えば、このように政策で対応せざるを得ないのです。第二次大戦中、植民地からの食料補給を絶たれたヨーロッパ諸国は、食料を海外に依存することの危険性が骨身に沁みたのでしょう。同時に自国の食料生産に対する国民のコンセンサスがあるので、こうした政策が可能だということも言えると思います。

2. 「農」は日本の文化の源

翻ってわが国の農業はどうだったのでしょうか。

神話の中で高天ヶ原の神々は、田を作り、機を織るなど、当たり前のように日々の仕事をされています。オリンポスの神々が事あるごとに戦いをし、戦いの合間には恋と謀略を練ることに明け暮れているのは、何という違いでしょうか。神話が民族の深層意識を表しているのだとすれば、日本人にとっての仕事（農作業）はそれ自体が目的となる神々の行為であり、欧米人にとっての仕事は、オリンポスの神々のようにこの世で贅沢三昧をするための手段にしか過ぎないということになります。

「百姓」という言葉は今では差別語のようになっていますが、元々皇族・貴族以外の農商工に携わる庶民のことを指していました。姓は世界中で職業を表すことが多いのですが、農民を百姓と呼ぶのは、百の職を持つように、彼らが「なんでもできる」或いはすべての職業の源であることから名付けられました。実際に、鍛冶屋も大工・左官も商人も、もとは農民であったものが専門化していったものです。そして、日本人の精神を形成する上で大きな影響を及ぼした武士道、その武士の源流は独立自営農民でした。ヴァイキングや十字軍などの略奪を目的とした戦士ではなく、武士は自らの土地と生活を守るために武技を磨きました。自営農民が衛士となったのが武士の始まりです。ですから武士の世界となった江戸時代、下級武士が禄の少なさを農業をすることによって補うことは少しも恥じることはなかったのです。士農工商という身分制が固定化される前は、士と農の境界はあってないようなものでしたから、それも当然のことでした。

そして、現代においても天皇陛下は、毎年田植えをし、稲刈りをして収穫の喜びを神々と分かち合っています。天照大神が孫のニニギの命に稲穂を与

え、これをもって大八洲を豊葦原瑞穂の国としなさいと命じられましたが、ここには深い意味が込められています。あらゆる文化・文明の源が農業であることは論を俟ちませんが、かつて栄えた世界の四大文明はいずれも今は砂漠と化して見る影もありません。これは小麦を文明の基盤においたことがその原因です。小麦の連作は耕土を痛め、連作すればするほど収量は漸減していくことになります。中世ヨーロッパでは輪作（他の作物を間に入れて作ることでより連作を防ぐ）を導入することでこれを回避しましたが、古代にはこうした知識はなく、疲弊した耕作地は放棄されて砂漠化していくことになります。

しかし、稲作は違います。元々麦と比べると単位当たり収量が遥かに大きい上に、水田で作ることでより連作障害は防ぐことができ、ほぼ半永久的に耕作が可能となります。この狭い国土で、輸入に頼ることなく、江戸時代で3500万人を養うことができたのも稲作のおかげです。現代では、技術の進歩で江戸時代の2倍の収穫を得ることができるので、仮に穀物の輸入が全て途絶えたとしても、7000万人の人口を養うことができるでしょう。単にこうした安全保障上の問題だけではなく、日本の文明・文化のほとんどが農業、もっと端的に言えば稲作に由来しています。（以下、次号に続く）

8. 営業力強化に向けて思うこと

大西 孝明（応物 S54）

成績が悪い学生が、景気の悪い時代の就職手段として、営業を志望してから30年以上の歳月が流れ、現在はIT業界の営業コンサルタント会社をやっています。

企業の発展に営業力は必要不可欠なので、重要な職種であることは誰も否定しませんが、ドラマなどでは顧客の無理難題に耐える屈辱的な職業として描かれることがよくあります。営業経験のないドラマの脚本家は、個人の買物で出会う販売員のイメージで営業の仕事を描いているのでしょう。しかし販売と企業を顧客にする営業（以下「法人営業」）とは似て非なる職種です。

個人も企業も購入する「車」を例に考えてみましょう。

まず購入目的が大きく違います。「個人は消費」

に対して「企業は投資」です。決定までの流れも大きく異なります。個人は自らが利用者・検討者・決裁者であり、自己資金を使い、結果も自己責任なので明確な購入理由は不要です。車のセールスは顧客の気分が良ければ衝動買いもあるので、機嫌を損ねないよう努力します。また個人は「消費」を減らしたいので「値引き」には敏感に反応します。

これに対して企業は利用者・検討者・決裁者が異なり、株主・銀行から集めた他人の資金を使って、売上・利益増加を目指す投資なので、結果は経営責任を問われます。たとえワンマン社長でも、経営に直結する高額投資は、多くの関係者に検討させて、稟議や取締役会承認など複雑な手続きを経て発注先を決めます。また経営者の評価は投資の成否で決まりますから、「値引き」ではなく「投資対効果」に注目します。車のセールスは「注文書に印鑑を押してください!」と個人の購入決断を自らの力で引き出せます。しかし法人営業は直接関与できない顧客内の会議で発注先を決められてしまうので、スポーツ選手が「代理人」を使って球団と交渉するように、営業と利害関係が一致した人（キーパーソン）に活動してもらって受注に結びつけます。

ところが設備など大型投資の決定に関われる「キーパーソン」は企業内に1%程度しかいません。(1000人の企業でも10人程度です)

法人営業は、数少ない「キーパーソン」を見つけ出して、「代理人」になるよう説得する仕事なのです。

個人はしばしば感情で判断することがありますが、企業の購買活動は常に理詰めに行われます。法人営業は自社・顧客・商品・競合などの「情報」を理解してから、「戦略」を考えて、顧客訪問をして「売込み」と新たな「情報」を入手して、「戦略」を修正するサイクルを回しています。

ところが「具体論である戦略」を考えるためには「抽象論である理論」を知らなければなりません。(スポーツには「セオリー」、囲碁・将棋には「定石・定跡」と呼ばれる「理論」があります)

営業力強化の近道は、個人も組織も「営業理論」を理解することです。実現できれば、適切な戦略立案ができて、効率の良い活動できて、正確な勝敗分析もできるようになるからです。

9. 農・工の両輪をもっと活用しよう

若月 満 (化工 S54)

私は昭和54年化学工学科卒業後、ドイツの外資系総合化学会社で30年近く化学品の貿易営業や国際調達に携わってまいりました。

企業退職後は在職時に取得しました産業カウンセラーやキャリアコンサルタントの資格を活かして生活・就労相談業務に就いております。

就労相談業務を通して中高年の方々や若者とあらゆる年代の方々及び障がい者の就労支援を行ってまいりました。その中で特に強く感じたのは表向き仕事探しですと言って相談に来られますが、よく話を聴くと実は……と言ってメンタル不調が隠れているケースにたくさん出会いました。

この場合メンタル不調が改善されませんとなかなか就労に結びつかないことを体験しました。

現在は千葉県内で生活困窮者等の就労支援を行っていますが同じようなことに遭遇しています。長く仕事に就いていないと社会との繋がりや生活のリズムが崩れてしまい、それが引き金となりメンタル不調に陥ってしまうようです。

このメンタル不調の改善に「農業体験」が役立つことが分かり何人か体験して頂きました。まず朝起きて太陽に当たり、自分が植物の手入れをすればただ植物はその努力に応え成長し実を稔らせることを体験して、自分でも「何かの役に立つ」ことが実感できて再起に繋がるようです。

このように農業体験を通して体調を整えて農業及び工業関係の仕事に就いて自分の居場所を見つけて行く流れを考えてみますと、まさにわが母校の「農・工」の2つの両輪が有機的に結合して人々の自己実現に寄与しているように思えるようになりました。

これからは地球規模で環境を維持しながら産業活動をしていかなければならないサステナブルな社会をつくって行く必要があります。

その場合、農と工の学際領域が多いに活用され役立つのではないかと考えています。われわれOB及び同窓会は農と工の学際領域を育成支援する体制作りをすることで社会貢献に寄与すると共に農工大の価値を高めることに繋がると思います。

MEMORIES WITH TUAT

Dang Quoc Dung (ベトナム／連農 H21)

I am Dang Quoc Dung, from Vietnam. My Japanese friends always call me “Dan”. I achieved my master degree (2006) and Ph.D degree (2009) at Tokyo University of Agriculture and Technology (TUAT), Japan.



After obtaining my Ph.D in major Natural Resources and Environment in September 2009, I came back to my country and currently, I am a lecturer at Ton Duc Thang University, one of the leading universities in Vietnam. Although I have been working in Vietnam for five years, memories about my time at this dear university have always been in my mind.

TUAT is a state university which was established 138 years ago. Compared to universities in Vietnam (usually 60 years), this university is much older. Especially, the TUAT has two majors: agriculture and technology, which research on renowned fields such as natural resources and environment, biological technology, computer science, robotics, etc. This is the mutual Agri-Tech model which is being applied in many Vietnamese universities.

Japanese professors are very helpful. I could always get support from them both in lab and outside of the lab. Students could freely ask questions in class and if they needed further explanation, they could make an appointment with their professors or send them emails. I remember once I did my assignment in the mid-night and really wanted to get clarifications from my professor, I sent him an email and surprisingly, I got a reply immediately. Despite having busy schedules, all of my professors were always willing to support me. The two professors I miss the most are Professor Hiroyuki Nakamura and Professor Yoshiharu Ishikawa. They not only supervised my researches dedicatedly but also taught me a lot of invaluable knowledge and life experience. Until now, when becoming a lecturer and instructing my students, I could understand my supervisors’ patience and enthusiasm at that time.



Japanese students are very eager to help international students. I remember on my first days at the university, they showed me how to classify garbage and where it should be located, register library card, etc. They introduced many students’ clubs to me such as martial art club, music club, culture and language club, etc. I was impressed by their friendliness.

The university’s student services are very supportive. All staff members are approachable and helpful. I was informed abundantly about the university’s policies and procedures of enrolment, dormitory, health services, insurance, etc. I have learnt from them that good services include responsible manners, intention to detail and responsiveness.

The university also supported students in searching for scholarship. There were also tuition fee exemption policies for students having financial difficulties. At that time, my monthly expenses were about 80000 yen including food, house rent, books, phone and transportation. This amount of money was equal to an average person’s 8 months salary in Vietnam. Without support of the scholarship and policies, I could not continue my study and pursue my dream.

I also cannot forget the field trips to former capital Kyoto and Kanagawa prefecture with my Professor Yoshiharu Ishikawa, my friend Wakahara Taeko and other students in lab. The professor instructed us in sampling very specifically. Although the sampling was conducted in mountainous areas, everybody did not feel tired when climbing mountain. Through the trips, I have learnt that in order to work effectively in a team, you are required to strictly follow the team rules and maintain a strong spirit towards your aims.

My trip to Nagoya ski resort with other international students of TUAT is my unforgettable memory. For a person coming from a tropical country with annual average temperature 24℃, skiing for the first time was a great experience. I have to say that autumn is so glamorous. I love early mornings when I could hear the sound of falling leaves. Secular trees with yellow leaves at the entrance and ancient appearance of the university created peaceful scenery. Sometimes, wind from stadium and sport hall made the leaves fall on the small paths like yellow rugs to the tennis court. I miss summer with cicadas’ sound and spring with many memorable festivals. I noticed that what makes spring in Japan special is cherry blossom. Many people visited Japan in this season because of those glorious flowers. I still remember spring of 2009, some Japanese friends and I wandered around the campus for flower viewing, gathered for a drink to say good bye to those who were about to graduate. The nostalgic feeling has stayed with me until now.



Peaceful Fuchu city and modern but ancient TUAT have always been in my heart since my first step in Japan. I am grateful for having had a chance to study here. TUAT is always open to international students and is an ideal place to start your academic journey.

V. 趣味に拘る

1. 農作業のサイクル

東 功 (織工 S38)

毎年3月半ば過ぎに分けた坊主知らずネギを新しい場所に植え替えることから新年度の農作業が始まります。その後、ジャガイモの種芋を植えます。4月になるとナス、トマトなどおなじみの野菜苗が売り出されそれらを買って植えますが、そもそもこういうことに興味を持つようになったのは40年以上前になります。S38年に織工科を卒業して繊維会社に入りましたが2年で退職し、少し勉強して数学教師として伊豆七島の都立三宅高校に赴任し、同僚から教わって野菜作りを始めたのがきっかけです。島ではほかに釣りと囲碁を教わりました。釣りはやめました。ザル碁と植物栽培は続いている次第です。6月になると夏野菜やブルーベリーの収穫です。7月の天気の良い日にはジャガイモ掘りで、子供一家も手伝いに来て大賑わいです。夏野菜がそろそろ終わりに近づく頃、今度は秋野菜の登場です。大根、ターサイ、白菜、キャベツのほかほうれん草は4回に分けて播種します。10月にはサツマイモの苗が大きく育ち、いつも大きな芋が沢山、穫れます。同時期に私も関わっている「青少年を育てるつくば市民の会」の年間事業の一つとして「サツマイモ掘り大会」があります。これはつくば市の荃崎地区の方を対象に無料で芋掘りを楽しんでもらうもので、毎年1000人位の方が応募されて一人5株を掘ってもらうもので4人家族で来ると15~16kgの収穫があり喜ばれています。この会は市民から任意ですが年300円の会費をいただきその還元策の一つとして実施しているもので毎年大好評です。ここでいつも思うのですが、プロの作った芋と自分の作った芋が同じ品種で同じ植え方なのにどうしてこうも出来が違うものかということです。プロの作った芋は形のよいものが多いのですが、自分のはずんぐり型が多く売りものにならないようなものが多いのですが金団作りはちょうどよく重宝しています。

花も楽しんでます。特に次の花は私の自慢です。

パンジー……8月末に播種して、年末頃から咲き出して5月一杯楽しめます。

いつもいろいろな色の株が沢山作れて狭い庭一杯に咲き誇ります。

帝王貝細工…別名「ムギワラギク」と言われるように咲いているときから花がカサカサしてドライフラワーに最適で、5年前に作ったものが未だきれいに飾られています。

アマクリナム…8月末から霜が降りるまで咲き続ける球根草花でピンクのラッパ上の花が人気があり、何人かの方に増えた球根を差し上げて喜ばれています。

すでに後期高齢者入りしていますが、こんな生活をこれからも続けていければと思うこの頃です。



貝細工



2. 「森の生活」 顛末記

池田 典昭 (林 S49)

私は昭和49年林学科を卒業し、宮崎県庁に38年間奉職した後、民間企業に第二の職場を得て四年目を迎えています。退職したら鬱陶しい人間社会と距離を置き、大自然の中で花、野菜、果物そして森づくりと読書に毎日を過ごすことを夢見てきました。

このため50歳の時、市内から約20Kmの所にスギの伐採跡地3.6haを購入しました。2年ほど探し求めた甲斐があって、狭いながらも車道のある南向けの高台は、宮崎の霊峰「高千穂の峰」を真正面に臨む絶景の地でした。早速、軽トラを購入し林内道路や小屋作り、整地作業を行い、約2haは地元森林組合に委託し、スギ、ヒノキ、クヌギ、サクラなど



著者と山小屋

多様な樹種を植栽しました。その後の下刈りは自分で行いましたが、夏の真っ盛りにはアブ、蚊に悩まされながらの雑草との格闘でした。大学時代の演習林での実習と空手部の「愛のしごき」を思い出しながら、数年間懸命に耐え続けました。

一方、平地の一部を開墾し、実家から持って来た耕耘機を使い、野菜作りも行いました。最初は、苗を植えてさえおけば、無農薬、無肥料で何でも立派に成長しました。スイカ、カボチャ、トマト、ゴーヤなど食べきれないほど収穫でき、近所へのお裾分けもできました。しかし、3年目ころからイノシシが出没し、野ウサギ、シカに悩まされ、防獣ネットを張り廻らしましたが、趣味の世界の人間と生活をかけた野生動物の戦いは、所詮、勝負は見えていました。最後にサルの群れによる立体攻撃を受け出したら、全てを諦めざるを得ませんでした。

それでも、樹木の生長は早いものです。手入れを始めて10年、退職を迎える頃には造林地もほぼ成林し、小屋の周囲も桜、桃、アジサイ、彼岸花が咲き、柿、枇杷、柑橘類が実をつけはじめました。

夏の暑さから涼をとるために移植した高木のクスノキも、自然林の体をなすようになりました。なにより春のワラビ、ゼンマイ、タラの芽、秋のアケビ、山芋などは、知人を招待して収穫を楽しむ事ができました。約束された毎日が日曜日、森遊び三昧の日々が目の前まで近づいており、野菜づくり以外は順調のはずでした。

つまずきは色々ありました。年金カットによる生活費確保のための再就職、森林でのマダニ感染症による死亡事故の発生など、森の生活を堪能することが困難な状況になりました。特に退職に合わせるように父が亡くなり、予定に反し実家の田、畑、山林を急遽、自分が相続することになったことは致命的でした。このため宮崎市から実家の小林市まで片道約1時間30分を、一人暮らしの母のための病院通い

や日用品の買い出し、田畑の管理に毎週回通うこととなりました。

畑85aと田の一部13aは、近くの若者といっても既に60歳近い知人に借りてもらっていますが、耕作に不便な23aの田は、慣れない手つきで自分で古いトラクターを操って管理しています。柿、栗、梅の樹園地は、手入れ不足で自家用がやっとの収穫量です。できれば田畑すべてを耕作放棄したいのですが、雑草や害虫の発生源になり隣地に迷惑をかけるのは必定です。そのほか田舎では集落の水路の補修、道路の草払いなど、無償の出役も結構あります。売るに買い手無く、自分で耕作するには体力も能力もなく、途方にくれる事も多いこの頃です。でも先祖が血の滲む思いで守り、大学時代までの自分を育ててくれた恩返しと思って田舎第一で頑張っていますので、「森の生活」三味はいよいよ遠のいていくようです。

3. 造園技能が面白い

古川 勝也 (林 S50)

私は昭和51年に林野庁に就職し、37年間務め平成25年3月末で定年退職しました。

定年を迎える数年前から、定年後には今までと違ったことをやってみようと思うようになりました。人生を2度楽しむことができるならやってみたくないと。高校生の頃、将来の進路をあれこれ考えた時のように、わくわくしていました。

従来から、道具や機械を使って物を作るのが好きで、その作り方がだんだん上手になっていくのを楽しんでいました。

また、植物の形態や生理に興味がありました。そこで選んだのは、造園の技能でした。

退職後の平成25年度の1年間、職業訓練校の造園科に通い、26年度から地元の小さな造園会社の臨時作業員として働いています。

技能は本を読んで覚えられるものではなく、何回



も繰り返して体に覚えこませて身につくものです。初めから重要な作業をやらせてもらえません。それでも、少しずつ上手になっていくのを実感できるのが面白いです。

そして、朝、家内から弁当を渡してもらい、「行きます」と言って出かける。夕方剪定が終わると施主さんから、「ああさっぱりした、ありがとうございました」と声をかけてもらう。「ただいま」と家について風呂に入り、上がってビールを飲んで、ああ今日も一日きつかったなと充実した気持ちになる。そんな簡単な日々の繰り返しですが、ささやかであっても人の役に立っている、社会とつながっているという実感があります。

最近では、ちょっと高い木に登って、安全帯をつけて鋸なり剪定鋏を使っていると、そのドキドキ感がいいと思っています。もっと木登りが上手になりたいくて、ツリークライミングの検定も受けました。さらに高度なツリークライミングの技術を身につけ、特殊伐採の手伝いくらいはできるようになりたいと思っています。

この他、地元の森林博物館等が主催し、おばさん方や小学生が参加する植物観察ツアー等のガイドもやっています。最近は少ないですが日当が出るので張り合いがあっていいです。

また、白神山地の巡視もやっています。これは環境省が団体に委託しているもので、内容は、白神山地の主に沢を日帰りで行き、その時々の植物、動物の記録、入林者への指導等を行うものです。お金をいただいて白神山地の沢歩き（泳ぐこともたまにある）、山歩きができています。

遊びでは、夏は八甲田の山岳道路をバイクで走り、冬は八甲田山、岩木山等でバックカントリースキー、スキー場でのスノーボード等をして楽しんでいます。

体がどこまで続くかわかりませんが、わくわくしたり、ちょっとドキドキしたりと、楽しく生活しています。

4. リスト・マニア

東野 正 (林産 S50)

大学卒業後に岩手県職員として採用され、あっという間に38年が過ぎて2年前に定年退職となり、今、自分の人生の整理を始めている。

岩手県林業試験場に16年間、それから行政部門で2年間過ごしたのち、改組された岩手県林業技術センターで20年間勤務し、その間通算で



ブラハ・カレル橋にて

34年間、木材利用関係の研究に取り組んだことになる。学会や研究会での発表、所属機関での研究報告や地域の情報誌などへの投稿を整理してみると、連名を含めて400以上になる。注目を浴びるような華々しい成果というものはあまり無いが、地域の木材加工産業の立ち上げや育成にはいくらかは貢献したレベルではあるものの、その発表実績リストの整理を始めているのである。

発表した文献が掲載されている全ての冊子を手元に揃えて置ければとも思ったが、書齋にはそのスペースが全く無いため、その一部をコピーして手元に置いているものの、私が死んだらただの紙くずになり家族に迷惑になるので、せめてリストだけでも残したいと思い整理することにしたのである。

そのリスト作成が一段落してからは、例えば県外への旅行先のリストもまとめ始めた。出張や旅行先のリストを地方別に作成することにしたのである。日記や手帳を引っ張り出して見たが、若い頃の記述はメモ程度のものが多くて細かい点までは分からない。そこで、入手した観光パンフレットや入場券の半券、その当時の小遣い帳などあちこちひっくり返し、記憶をつなげながら整理を続けている。

地方別にリストアップするので、隣県への日帰り旅は勿論のこと、例えば中部地方に出かけた際に、半日でも近畿地方に足を踏み入れたことがあれば、それぞれ別にカウントするというややインチキな方法（勿論、単に通過しただけの場合はカウントしない）であるが、現在で約880回となっている。人生80年として、年12回（月1回）県外旅行をするという目標を立てると延べ960回で達成できるので、その数字を一応の目標にしている。加えて、雑誌や本に「死ぬまで行きたい風景」的なリストが紹介されていると、今後行くべき場所リストに追加して参考にしている。

それから、観た映画、読んだ本、CD・LPなどのリストや趣味で書いている詩や散文の発表リスト

の作成など、少しリスト作成にとらわれた生活になっている。

死ねば、私の記憶そのものは消えてしまう。最近の科学では人間から記憶を取り出して保存する技術も開発されようとしているが、人間それぞれ秘密にしておきたい記憶もあるわけでそれまでも保存され、読み出されてはかなわない。だから実害がなく

極めて自己満足的なリストを作ることで自分の人生を振り返ることにして、もしかしたら子供達がそれを眺めて、ダメ親父が実はこんなことをしていたと気づいてくれればとも思っている。

最後には、どんなリストを作ったについてのリストも作らないといけないかもしれないが。

(岩手県支部長)

コラム<海外> 3

First Impression in Japan

Vu Thuc Linh (ベトナム/国際院 H21)

Six year ago, the first time to come to Japan by development cooperation between Vietnam and Japan for capacity building of Vietnamese people. I had read many books and watched document-aries and movies about Japan before falling in line with new life, but everything was quite new for me when I started living in Japan. And Tokyo University of Agriculture and Rural Development was a good university to help me in completing my research on Vietnam agricultural economic development assessment. Especially, my professor is Japanese but his second language is Vietnamese, this was a good chance to discuss deeply my thematic research because I could explain it in my language when I feel difficult to explain in English sometime.

I have lived in Japan for nearly 3 years. Like a lot of foreigners, Japanese people often ask me to tell them what my first impression in Japan was. For many years, and until now, I never really thought about the question so seriously. I just said something like, "Oh! The streets are very small and clean, there are a lot of sky buildings, the weather is wonderful, especially the spring is sakura season, and Japanese people is very very friendly and enthusiastic ...". Well, one day I decided to think really seriously about my very first experience in Japan that impressed me. Well, this happened just out of the university. A Japanese friend picked me up and planned to drive me to Shinjuku and Shibuya. It was a surprise by alternation among high building, modern house with traditional houses, it makes sense to maintain traditional cultures in the context of industrialization, but it was not first my impression. My most impression began when my friend took me to a typical small Japanese restaurant that serves things like rice dishes called "donburi" or ramen noodles. At that time, I couldn't speak but a few words of Japanese, though, and was totally unprepared for what happened next.

Just inside the sliding door, the space of restaurant is small but everything is set up very tidy and romantic with yellow light. Near the door, there was a cash register to the right. Behind the register was a young lady wearing an apron, looking like she was operating the till between waiting tables. When she saw us come in, she looked up and yelled in a very loud voice directly at us, something that I could not understand.

Another waitress, who even though she was obviously taking somebody's order and had her back to us, swung around, looked at us, and yelled at us with the same sharp tone of the first lady. Then, even from the back of the shop, one guy was standing behind a small window which is enough space to give food out, even though he was obviously preparing the food, he looked at us and yelled the small word like ladies, too, but he was even louder than them.

It was so stressful, there was no emotion on their faces while they were yelling at us. They did not smile or even grin. They were most definitely yelling, though, and I have to admit that I was a bit frightened.

So, I kind of kept my head down and walked behind my friend to the table where we were to eat. As soon as I got the chance, I whispered to him, so as not to be overheard, "What were all of those people saying to us?" Quite frankly, after the third person, I was thinking that they didn't want us in their establishment.

My friend smiled at me and said, "Oh! They were just saying, **"welcome"**. I have to say I was relieved, but still in shock.

So anyone who wants to visits Japan for tour or study or any purposes should soon come to learn the word **"irashaimase"** which really does mean **welcome**. This is typical culture of Japan to bring comfortableness and satisfaction to their customers when they visit and try their services.

Until now, it's the interesting thing for foreigners as like me, and an enjoyable feeling is that after a short time staying in Japan, you really get to used to it because it is everywhere. It is all part of living in Japan as well as my first impression when I come to Japan.

VI. 広く伝える

1. 「絹の歴史」と篤学の大先輩

酒井 英脚 (養蚕 S33)

「絹の歴史」という書がある。著者のエルネスト・パリゼーは、フランスのリヨン市の絹織物製造を本業とする実業家であったが、ヨーロッパにおける蚕糸絹業の技術、歴史の探求に情熱を注いだ研究者でもあった。第一部(1862年刊)と第二部(1865年刊)に分かれ、第一部は7世紀以前のヨーロッパへの絹の伝来、絹生産の始まりと歴史などについて、また、第二部は7世紀から12世紀にかけてのヨーロッパ絹工業の発達、絹織物の生産・消費、貿易などについて記述されている。著者は絹織物の真の祖国は東洋であるとしつつ、実に膨大な文献を引用研究し(わが国江戸時代の代表的養蚕書の上垣守国「養蚕秘録」も引用)、研究者としての理論を展開している。本書はわが国の蚕糸絹業の歴史にとっても有用な書であると思われる。

しかし、原書が仏文であるが故に、一般にはなじみにくく、原書の全文翻訳がわが国斯業の発展に資するとして、その難業に取り組んだのが、わが同窓会の大先輩である渡辺^{かつじ}二氏であった。氏は高等蚕糸学校を卒業、さらに京都大学農学部農林経済学科に進学し、卒業後、農林省蚕糸局蚕業課に勤務、原書を手にしたのはその頃の昭和8、9年頃といわれる。氏はその時から原書の翻訳を心に期していたという。農林省を退職して、昭和35年頃から翻訳に着手、心血を注いで実に8年、訳稿成ったのが昭和45年であった。当初の印刷は自費出版の200部限定版(非売品)であった。通常では入手し難く、久しく公刊が望まれていたが、農林省蚕糸局時代からの知己である布目順郎博士のお力添えもあり、「絹の道」として雄山閣から出版された。

渡辺^{かつじ}二氏は新潟県巻町(現新潟市)出身であるが、私の祖父、父も巻町出身の上に同じく東京高等蚕糸学校卒業で、氏は同郷・同窓の知縁をいただいていた。特に祖父と氏とは県立巻町中学校の3年先輩後輩の間柄で、その当時から親交があった。祖父の文三郎は農林省蚕糸試験場松本支場長を最後に故郷

に帰ったが、巻町在住の渡辺^{かつじ}二氏とは再び交流を深め、家族ぐるみのお付き合いをいただいた。

私も同窓の後輩として、氏のお宅へは度々お伺いし、氏の聲咳に接することができたことは、これまでの人生80年の中で大切な思い出となっている。氏の静かな語り方と心に残る数々のお話の中で、翻訳への燃えるような情熱と信念を感じたことを忘れることができない。

氏は「絹の歴史」翻訳後も心臓の持病を抱えながら、さらに5冊もの蚕糸絹業関係の仏語書の翻訳を91歳まで続けられた。このうち印刷されたのは「絹の歴史」だけであるが、その後、翻訳されたものは翻訳原稿に原書を添えて蚕糸科学研究所(財団法人大日本蚕糸会)に納められたとのことである。

平成3年8月11日、きく夫人と娘美和さんに看とられて、93歳で亡くなられた。誠実な人、信念の人、篤学の大先輩であった。



2. 水研会—水谷研究室関係者の集い

杵村 義昭 (織化 S34)

追悼 東京農工大学 繊維学部 元教授 水谷久一先生の50回忌を終えるにあたり、御遺徳をご報告致します。

東京農工大学は明治7年に設置された農事修学場と蚕業試験掛をその源流とする。「殖産振興と富国強兵」なるスローガンに沿って発展し、以来大戦を経て、日本の国策大学教育政策の一環として、昭和24年(1949)



に東京繊維専門学校が繊維学部、東京農林専門学校が農学部として新制大学・東京農工大学が発足した。更に昭和37年に繊維学部が工学部に改称され、種々学科増設、名称変遷を経て今日の発展を見ている(註1)。

一方、専門学校から新制大学移行に伴い、教員の充実が計られた。水谷先生は東京工業大学・星野敏雄教授の主催する有機化学教室を昭和15年に卒業、直ちに東京工業試験所(産業技術総合研究所[産総研]の前身の一機関)に勤務された。「合成繊維・合成樹脂」、「ナイロンとテトロン」、「塩化ビニル樹脂」などの分野で有名な研究者・著作者であった。そして日本のこの分野の黎明期に、新制大学に相応しい教員として昭和27年に本学に招かれた。同時に伝統ある絹、綿の分野に、東大から岡本奨先生、東工大から大野泰雄先生などの教員が着任した。斯様に多士済々な人材が揃い、繊維学部・繊維化学科が充実し、更に発展した(註2、註3)。

第1回水谷研究室生は昭和29年に卒業、同研究室卒業生以外でも専門学校時代の学生の面倒を見た時期もあり、後に「水研会－水谷研究室関係者の集い」と当会を命名した由である。水谷先生は、優れた研究者であると共に学生の指導・教育に熱心で、多くの学生に感銘を与えた。また、多くの者が、実社会に出てからも、先生の御世話になった。先生の没後50回忌を済ます今日まで、当会の「集い」に、年代を超えた多くの卒業生が毎回出席し、その御恩を偲んでおり、それが如何に大きいものであったかを如実に物語っている。

昭和39年(3月)は、戦後の復興途上にあつた日本で初めてオリンピック(東京五輪)が開催された年であり、繊維化学科の後身、工業化学科第1回卒業生57名が巣立った節目の年であった。当時水谷先生は、学内では学科主任、評議員として、学外では国内プラスチック産業のリーダーとして、ISO関連でも日本代表として国際的にも活躍されていた。しかし、11月10日に「悪性肉腫」で虎ノ門病院で急逝され(享年48)、なんとも悲しむべき年になった。爾来、水谷先生の遺徳を偲ぶ当会は、50年もの長きに渡り存続し続け今日に至った。ここに50回忌を終えたのを機に、追悼文(思い出文集)を水谷先生に捧げた次第である。小冊子とは云え35ページ余に亘る故、全文を投稿するには字数多く、大部分を割愛せざるを得なかった。従って、その冒頭文を若

干改編し、水谷先生の御遺徳を偲ぶ者が50年経った今日でも多く居ることを、本稿に述べた次第である。

なお追悼文は5人の幹事(水谷先生在任期間を、卒業年度に応じて5期に分割)が、各期間を担当して記述した。その他の卒業生及び水谷研究室以外の卒業生から寄稿された「先生の思い出」も掲載した。また「記録」として当会の「歩み」、「思い出の写真集」及びご逝去当時の「追悼関係の報文」が3編あり、これらも併せ収録した。

なお本会の有志28名は、平成26年11月10日に本願寺築地別院・和田堀廟所にて50回忌の参拝を済ませ、先生への感謝の気持ちを改めて捧げた。併せてこの「思い出集」を供えて、50余年間存続した当会を終了することとした。また「思い出集」は現在ご子息に守られている水谷家の御仏壇にも納められています。

以上謹んでご報告致します。



(註1)：東京農工大学・同窓会会員名簿(p3～7)、沿革 参照

(註2)：東京農工大学・工学部百年史 新制大学の発足(p79～84)、他 参照

(註3)：追悼文集・大野泰雄の思い出 岡本名誉教授の文(p69～72)、年表(p216) 参照

[水研会－水谷研究室関係者の集い] 平成26年(2014)11月10日 記

幹事：麻薙悦男(織化29年卒)、中島常雄(織化30年卒)、杵村義昭(織化34年卒)、小島浩(織化35年卒)、大塚讓(織化38年卒)

*文集「水谷先生の思い出」を希望される方へ：事務局(小島浩、TEL & FAX：03-3390-7017)、E-mail：hiro-koji@cello.ocn.ne.jp)へ何れかの方法

でお申込み下さい。実費（含送料）¥1,000 でお届けします。また、国会図書館、東京農工大学の関係部署（工学部・農学部図書館、同窓会事務局、応用分子化学科事務局）にも寄贈されており、閲覧可能です。



3. 数奇な運命をたどった留学生お二人のこと

高畑 滋（農 S34）

金源珠さんは東京農工大学同窓会名簿、昭和4年（1929年）製糸教婦養成科〈不明者〉欄に記載されている。製糸教婦科は急増する製糸工場を支える女工の教育指導技術者を養成する学科として設置された。金源珠さんは母子家庭に育ち、授業料が払えなかったにもかかわらず、平穰高等女学校を首席で卒業したという。薦められて官費生として東京高等蚕糸学校に入学し、1929年卒業している。

官費生は卒業後指定する製糸会社に就職することになっており、片倉テーク支店に入るが、辞職し編集者として反日運動に加わる。南朝鮮地主階級出身の成有慶と結婚し、金日成率いる朝鮮労働党の活動に加わる。朝鮮戦争の戦禍を逃れて中国東北部に疎開する。1970年次女ソン・ヘリムが金正日と結婚し金正男（ジョンナム）を産む。後継者教育のため金源珠と長女ソン・ヘランは金正日官邸で20年間暮らした。1982年病身のヘリムと共にモスクワ経由でジュネーブにて静養する。金源珠は1994年88歳で死去した。この波瀾に富む人生は、娘のソン・ヘランの「はるかなり北朝鮮 金正日官邸で暮らした20年」（文芸春秋2001年）によって知る事が出来る。金源珠さん本人の回想ではないが、製糸教婦科在学中の源珠さんは、日本での教育を反面教師として捉え、帰国後独立のための人民抗争に身を投じたものと思われる。南朝鮮の出身であるにも拘わらず北朝鮮に留まって活躍したが、最後は亡命の形になった。手記を書いたソラン共々源珠さんは金正日の事を人間的には感謝していたという。本の中に金源珠さんが84歳の時に官邸のテニスコートでテニスを楽しんでいる写真が載っていた。平穰女子高テニス部で鳴ら

した腕前は衰えていなかったという晩年の生活に救いを感じた。

カメル・ハジュアンさんは同窓会名簿、昭和44年（1964年）繊維工学科、昭和46年（1971年）工学研究科製糸学専攻〈不明者〉欄に記載されている。外国留学生としては古い方だ。西アジア・シリアからの留学生は珍しかったと思うので覚えておられる方も居るに違いない。私がカメルさんと会ったのは1990年でソ連崩壊直後であった。先代ハーフィズ・アサド大統領の時代で、イスラエルと対抗するソ連圏の國と見られていた。



1990.5.27（左：カメルさん、右：高畑）

街では外国人にルーブル紙幣をドルと交換してくれとせがむ市民がいた。しかし、多くの市民の表情は明るく、店の品物も豊かであった。日本は戦争をしない平和国家で、同じアジアの国として誇りに思うと言われて照れくさい気持であった。カメルさんは現地日本人会の旅行で一緒になり、ローマ時代のシャイザール城遺跡を案内していただいた。日本に八年間も留学して奥さんは日本人だということで、流暢な日本語で説明をされ一同大喜びであった。「私は毎日日本料理を食べて、皆さんより日本的な生活をしていますね」と笑って話されていた。ところが今、シリアは大変な状況にある。バッシャル・アサド大統領になってから、アラブの春の影響か、反体制派の運動が盛んとなり、政府軍と内戦状態になった。これにシリアとイラクのイスラム国（IS）なる武装勢力がイラク北西部からシリア北部に侵攻して混乱の度を増している。イスラム国撲滅と称して外国軍が空爆して住民の被害が激増した。シリア難民は300万人と言われる。カメルさんは工業局の局長だと言っていたから、何処かに避難したのだろうか心配している。私が住んでいたアレッポの街は戦場となり、2000年の歴史あるアレッポ城が崩れ落ちる映像を見て、胸が潰れる思いである。

4. 中国政府 友誼賞受賞

田村 誠一 (織工 S45)

現在の中国は世界の工場を含め大きな市場でもあります。しかし、現実外交上はあまり良い関係にないと考えます。しかし、我々民間レベルでの友好は信頼があります。まして、中国の産業界の成長は目覚ましいものがあります。今や完全に日本のハイレベル競争へ対抗しつつあります。

しかし、ここまで急激に成長・進歩できたのは我々を含め世界から約61万人の外国人専門家の功績・貢献が大きいと中国政府が認識し、今後も更なる期待と協力の要請を考えていると理解しています。

そんな意味で人民大会堂への入場へは大変難しことですが、その場所を利用し中国国務院の最大限の対応で感謝してもらいました。ですから、李克強首相自ら接見挨拶をして記念集合写真を撮り、記念にプレゼントされました。更に、政府成立65周年の記念招待晩餐会に我々も特別招待され、習近平主席のスピーチと乾杯の音頭で美味しいお酒と料理を人民大会堂内大ホールで同席させていただきました。あまりに大きな会場にて、どのような人たちがいたのかわかりませんでした。あとで、CCTVにて確認し、益々すごい晩餐会と感無量でした。人民大会堂内でのセキュリティは厳しく、さらに、カメラ等の持ち込み、撮影は絶対禁止です。

中国で働く外国人専門家の最高の荣誉です。(寧夏中銀絨業 中銀Cambodia 公司、技術担当高級顧問)

5. 農工大グローバル・コミュニケーション集団部会発足！

釣屋 政弘 (生機 S54)

本学同窓会の組織下に2015年2月13日付けで、農工大グローバル・コミュニケーション集団部会(通称：NOKO G-Comm)の設立が同窓会理事会にて承認されました。設立発起グループは本学英語クラブ(ESS)のOBから構成され、永田会長(S47電気卒)及び和田副会長(S53農芸化)を中心に23名でスタートしています。今後は同窓会諸氏の中から多数の方々をご参加される事を期待してやみません。4月4日に設立総会を開催し、会則および活

動方針等を定めました。NOKO G-Comm設立の目的は、在学生や大学関係者及び地域住民を対象に、ESSOB会員や、海外に深い知見を持つ同窓会員の海外勤務の経験や海外との人脈、交流などに基づいた情報を伝承し、これから海外で活躍しようとする方々の一助となる機会を提供することにあります。

本学の第3期中期(2016年～2021年)では、「世界が認知する研究大学へ」「世界に向けて日本を牽引する大学としての役割を果たす」がビジョンとして掲げられております。NOKO G-Commは微力ではありますが、本学の目指す姿にベクトルを合わせた活動に取り組みたいと念じております。まだまだ緒についたばかりの組織ですが、皆様方のご協力を頂きつつ発展させて行ければと考えております。

2015年度最初の活動内容として、5月に東京農工大学留学生センターの協力を得て本学留学生を招待して飯能市でのお茶摘み体験ツアーを行いました。本学卒業生でESSOB会員でもある内野氏(S49農学科卒)の経営する茶畑に中国、ロシア、インドネシア、ベトナム、アフガニスタン、ガーナなど多彩な国々からの留学生20名が参加しました。お茶の歴史、お茶の種類や製法、茶樹の育て方や製造方法、および美味しいお茶の入れ方などの日本茶に関する事を共に学び、実際にお茶摘みやお茶の製造を体験して頂きました。更に、日本古来の文化である折り



お茶畑近くの心王院より会場を拝借



参加者みんなで新茶の手摘みを楽しむ

鶴（連鶴）の講習も開催され、楽しい一日を共有する事ができました。

なお、NOKO G-Commでは2015年11月14日の農工祭（農学部）時に「こんなところに日本人（お仕事編）」をテーマとしたシンポジウム開催を予定しております。ESSOBでもありJICAにて海外での勤務が長い方に、アジアやアフリカでの経験を通じて、海外勤務の価値や留意点などについて講演して頂く予定です。

2016年度からは、海外の外部講師によるシンポジウムを開催したいと考えています。シンポジウム開催は、農工祭に併せて実施する計画であり、本学学生だけでなく地域の方の参加も大歓迎です。勿論、アジア・アフリカだけでなく米国や欧州に駐在経験を持つ人材も多数、本会に登録されており、幅広く世界への道標としての役割を果たしたいと思っております。

誕生したばかりの本会のご紹介をさせて頂きましたが、皆様方のご協力、ご指導ご鞭撻を賜りつつ発展させて行きたいと役員一同考えております。

6. 安藤哲教授の退官記念パーティー

渡邊 快記（生シ院 H19）

平成27年5月23日（土）東京農工大学140周年記念会館エリプスにて、安藤哲教授の退官記念パーティーを行いました。

先生のご希望で大きな会場での堅苦しい形式ではなく、同窓会のようなざっくばらんな雰囲気で行いたいという事と卒業するとなかなか大学のキャンパス内を見ることが出来ないという卒業生の希望から、学内の施設で行うこととなりました。

乾杯の挨拶は1985年卒黒津裕一さんから、「先生からは、研究は知識を増やす事よりも、それに向かう考え方を学びなさい。と教えられ、今もその言葉を胸に頑張っております。」といただきました。

50名の方が集まって下さり、会場内ではあちらこちらで談笑する姿が見られ、和気あいあいとした雰囲気の暖かいパーティーとなりました。

安藤研究室では、鱗翅目蛾類昆虫の性フェロモンの高い誘引性が、害虫防除へ利用可能であるのみならず、生殖隔離に直接関わる生理活性物質であると考え、蛾類性フェロモンの新規化合物の探索から生

産機構まで、あらゆる角度から研究を行ってきました。

そのため本研究室の特徴なのか、久しぶりに会う同級生との思い出話ばかりではなく、同じ蛾（！）を研究対象として扱った先輩や後輩との共通の苦労話や笑い話でも大変盛り上がりました。また、現在働いている業界や分野での情報交換や名刺交換など、新たな関係も生まれ、様々な面で有意義な集まりとなりました。

我々の世代では、今はなき合宿研修施設「湯の丸荘」で、スキー場の近くにあるにも関わらず夏に蛾類昆虫を採取しに行き、夜通し起きていた話やBASE棟が完成するまでの間、工学部の角の方で仮研究室として、少し狭めの研究室で実験した話など大いに盛り上がりました。

退官というと最終講義が行われることが多いですが、先生から「長く話したい」ということでしたので、長めのスピーチをお願いすることにしました。

学会等では、今でこそPCのプレゼンテーションソフトを用いた発表が主流ですが、以前は写真屋さん頼んでスライドを作り、それをもとに発表していました。

今回、退官するにあたり研究室を整理していたところ、その時のスライドが多く見つかったということでした。参加者の方の中にはそのスライドを使って発表した先輩方が何人かいらっしゃいましたので、先生から当時の思い出と共に、急遽、贈呈式が行われました。

遅くまで掛かって準備して苦労したこと、その先に素晴らしい結果があったこと、その思い出話を聴くうちに涙ぐむ方も何人もおられました。

そして、先生から「これまでの『フェロモン』という分野での私の業績は、皆さんが頑張ってくれたおかげです。本当にありがとう。多くの卒業生と久しぶりに話ができ、とても嬉しく思います。」と、大変心のこもったメッセージをいただきました。

安藤先生は、本学のシニアプロフェッサーにご就任されるということなので、またそのお話を聴くために集まりたいと思います。



7. MOT部会活動のご紹介

加藤 美治 (MOT H21)

同窓会MOT部会の活動をご紹介します。まずMOT (* Management of Technology) 部会は、平成17年に専門職大学院技術経営研究科技術リスクマネジメント専攻として発足した新しい大学院の部会です。既に10年が経過し現在では、工学府の産業技術専攻として技術経営を学べる専門職大学院として継続しています。

MOT部会は「創々会」(ものづくりとひとづくり)と称して年1回の総会とは別に、毎月「MOTサロン」を開催しています。(平日の夜19:00から21:00まで開催) MOTサロンは、現在私が受け継いで主査を行っておりますが、1期生修了時から続いている活動です。当初は田町キャンパスイノベーションセンターを利用して開催していましたが、現在は公共施設の中央区区民館を借用することで開催しています。

MOTサロンの目的は、3つの場を確保することです。それは、1) MOT修了生の継続した自己啓発の場、2) 同期生との繋がりだけではなく修了期を越えた繋がり、3) 個人に対する気づきや勇気を与えられる場です。講師は、東京農工大の先生やMOT修了生、外部講師の方をお願いをしています。これまでの講義内容としては、単に先端技術やビジネスモデルの話だけではなく、幅広く話題を集めるようにしています。例えば、法律関連や財務会計、組織マネジメント、ソーシャルイノベーション、日本人論、環境問題など、多岐に渡っています。毎

回、講義に対する質問、意見が活発に行われるため、終了時間ぎりぎりまで議論を交わしています。また講義終了後は、近くの居酒屋にて講師の先生を囲んだ懇親会も開催し、更なる交流を深めています。参加者の皆さんは、問題意識の本質を共有している仲間ですので、近況の報告のみならず、職場での悩みや問題解決に向けたアドバイスなどをもらうことができます。そして、対話の中から、自らの行動の変革に向けた勇気もらうことができます。このように講義や交流の中から自分にとっての今後の行動に向けた多くのヒントが得られることがMOTサロンの最大の効果なのかもしれません。

皆さん業務を抱えていますので、参加したくても参加できない場合もあります。そのため、まずはMOTサロンを継続して開催し、いつでも参加できる環境を作ることを第1に考えています。最後に、多くの修了生の皆様の参加をお待ちしておりますので、どうぞお誘い合わせの上ご参加下さい。毎月発行している「MOT Newsletter」でご案内しておりますので、是非ご覧下さい。

(MOT部会長)



平成26年度MOT部会総会：元研究科長古川先生を囲んで
2015.4.11 (土) 田町キャンパスイノベーションセンター

コラム<海外> 4

Japan Impress on my mind Integrated agricultural development towards natural sustainable way and cultural value conservation for the future

Dinh Van Dao (ベトナム / 国際院 H22)

Before navigating to Japan for two year of agricultural study plan, I had understood that Japan have got many amazing achievements at almost of the social economic sectors by applying new advantage technologies in production such as automatic robots, biotechnologies, electronic systems ... and the human factors that has been also contributed to make a miraculous Japan, a unique country in the world. And after 2 years of enjoying Japan in studying master course of Tokyo University of Agriculture and Technology (2008 - 2010), when back to home country, I still keep following the changes of the Japan and again see the amazing attitudes of them about mutual affection and mutual love each other after Earthquake disaster through pictures of principle queuing up for food receiving of a little boy or the words saying sorry of journalist family about their son making disturb for the country



when he himself take risk in the war. Therefore, in this article, I would share an impress experience learnt about iron will of a farmer family for continuing their sustainable concept about the integrated agricultural development towards combination of natural-traditional-modern way in Fujieda Prefecture, Japan.

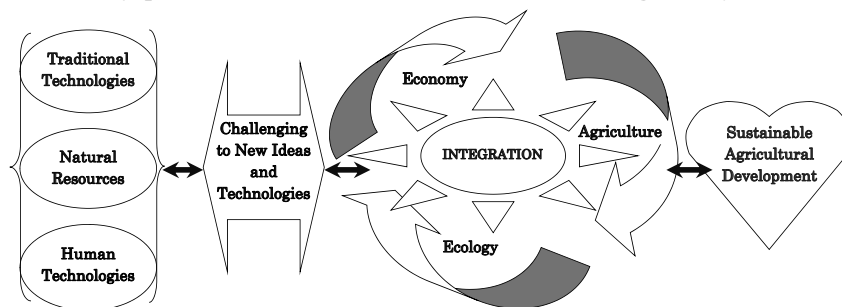
While, many other Japanese farmers concentrate on using the advantage scientific achievements in agricultural production to get more and more benefit and to minimize human labour investment, the Kinezuka Ayumi family still tries to keep developing their own agricultural practices that closely link with traditional and natural factors parallel with the new friendly technologies. In fact, in first period they did not get as much economic benefit as they wished, but they have the strongly belief that they will success in the future based on the integrated agricultural development.

For example of their organic tea production, they apply the advantage techniques such as using the machines for soil preparation, transportation of organic fertilizer, controlling the frog density for the tea field... in combination with tradition practices and knowledge of organic farming introduced by the University, even the organic fertilizer is produced by them through new methods (figure 1). For some first years, they did not get much as benefit as the next tea fields applied the intensive agricultural practice (figure 2). And, after some years later, with the concept of integrated production including factors of ecosystem conservation, safe quality of tea products and utilization of some advantage traditional practices, they have got the success in organic tea production by lower fertilizer treatment, no pesticide and lower labour investment, their tea farm still look better than the next ones (figure 2). Fertilizer preparedness is the emerge example by applying the fermentation methodologies they could make the most of the redundant and waste things from agricultural production and then they have available sources of organic fertilizers used for the organic tea or rice cultivation. And even they do not apply any pesticide or any chemical inputs for all production. Moreover, in some the first years, their products met some difficulties to enter the market due to cost price is quite higher than that of other products and no products' distribution networks. But, they try all their best with the future belief of success. And, in 2014, they got a ward for their effort due to not only their value market products with lower price, much consumption in the national market and also directly protect the ecosystem around their farm. Figure of gold medal as the evidence for the long effort for next generation (see facebook of Kinezuka: <https://www.facebook.com/ayumi.kinezuka?ref=ts&fref=ts>)

And moreover, they help to protect the tradition value things such as cakes made by rice, bean practices ... and support to educate the young generation which are losing oblivion in the modern life through the local festival and on-job training programs which they them self is the teachers and instructors. Finally, I would summary of the full picture describing the concepts and process for sustainable development of the Japanese farmers who would send the message about the advantage values of the traditional production concept as the path way for the young Japanese generation and world development (see next diagram).

Vice Director of Consultant Centre for Water resources economics and management Institute of Water resources Economics and management

Sustainable Agricultural Development Concepts: Understanding after Trip of Fujieda Prefecture Japan, 2010 (DINH VAN DAO, daohang1975@yahoo.com; VietNam)



Graph showing the path-way for sustainable development of the healthy world



Natural Resources (fig.4)



Advantages of Organic Production (fig.2)



Traditional Food or Traditional Technologies (fig.3)



Human Technologies (fig.1)

訂正のお知らせ

農工通信第88号(2015年1月発行)に掲載しましたI-1-1「生協誕生前後の裏話」に関して、筆者からのその後の報告に基づき、3頁本文(左列)31行目の『2年生になったとき、自治会の委員長になり』の部分を『3年生になったとき(昭和29年7月)、自治会の委員長になり』に訂正します。

農工大の今

同窓会誌「農工通信」（後期号）に学生コーナーを設けました。これは同窓生諸氏から、昔のサークルの思い出の中で現在のサークルの状況、また大学の情報等の希望が寄せられていること、さらには学生にも同窓会への関心を持ってもらいたいとの思いから学生コーナーを設けました。このコーナーの編集も学生諸君に任せることにし、現在、同窓生との交流（OB・OGとの交流会等）を進めている学生サークル「向友会」に今後の編集を依頼しました。 農工通信（後期号）編集委員会

農工大の情報、学生の現状等について、先輩諸氏のご要望にお応えするために、学生の視点から「農工大の今」を当コーナーでお伝えしたいと思います。皆様にはご要望をお寄せくださいますようお願いいたします。また、イベント等は同窓会とも協力して進めています。 農工大 向友会（学生サークル）

第1回「向友会」

向友会とは？

向友会代表 丹羽 祐太

「向友会って何？そんなサークルあった？」という方がほとんどだと思いますので、初回は我々向友会について紹介させていただきます。

私たち向友会は工学部にあるサークルで、3つのターゲット（運営委員、農工大学生、一般社会）に対して7つの行動指針（柔軟な活動、問題の解決、会員の成長、OBOGとの交流、外部との連携、メディアの活用、ネットワークの強化）を基に、「農工大に来てよかった」という満足度を上げることを目的として活動しています。創設は2010年と歴史は浅いですが、同窓会OBOGの皆様や生協、マイナビなどの協力もあって様々なイベントを企画、運営してきました。

◎活動内容

1) OBOG×在学生交流会

在学生が社会や将来について考える場として、OBOGが農工大へ足を運び若き後輩たちと交流する場として開催されています。多くのOBOGが集まり在学生と交流する機会であり、両参加者共に有意義な交流ができるイベントです。



【OBOG×在学生交流会】

2) みんなと行く工場見学会

2013年度より年に2回、同窓会「農工大支援ネットワーク」（AT-Netz）と協力して様々な職種の企業の農工大OBOGにアポイントをとり、工場見学に行っています。工場見学やその企業で働くOBOGとの懇談は為になることばかりで、大学生活だけでは知り得ない「働くこと」の大変さ、楽しさが理解できるイベントです。これら以外にも就活生向けの「内定者交流会」、「エントリーシート添削セミナー」や大学生活を楽しむための「学旅」「編入生交流会」「大学院セミナー」など様々な活動を行っております。HPやFacebookなどに詳細があります。ご希望の方はぜひご覧ください。



【みんなと行く工場見学会-味の素㈱】

「向友会」 HP：<http://www.tuat.ac.jp/~koyukai/>

Facebook：<https://www.facebook.com/kouyukai>

安全でおいしい肉を召しあがって、クリーンな地球環境づくりのお手伝いを...

食品副産物を利用した飼料原料から作ったエサで豚を飼育し、養豚から食肉加工、出荷まですべて自社一貫生産する、クリーンで安全なリサイクル工程が、エコ・フードシステムです。
飼料の製造から食肉の出荷まで、クローズドサークルの中で進行するので、クリーンな環境づくりと、畜産業の改良発展を両立させた画期的なシステムです。



会長 熱田 正行 (S44農学科卒)

〒289-3186 千葉県匝瑳市川辺208-1 TEL 0479-67-1025 FAX 0479-67-1026

E-mail cmrhq375@ybb.ne.jp

農工大の卒業生が醸す日本酒

改良信交
特別純米酒
あら玉

地元産幻の酒米「改良信交」を使用。後味のキレイな旨味と、冷でも爛れずのおススメ。

大吟醸 名刀 月山丸

華やかな香りと上品で深い味わい。名刀 月山丸のごとく、ご贈答にもどうぞ。

1.8L 2,484円 / 720ml 1,296円 (あら玉)
1.8L 10,800円 / 720ml 4,104円 (大吟醸)

※価格は税込です。その他商品多数ございます。お気軽にお問い合わせください。

1797年(寛政9年)創業、現在は卒業生の和田茂樹(応生H9)・弥寿子(応生H8)夫婦がお酒を造っています。お近くへお越しの際は、是非お立ち寄りください。全国配送も承ります。お気軽にお問い合わせください。あら玉 和田酒造合資会社facebookページもございます。こちら是非ご覧ください。



小さくても存在感のある
地元で愛される地酒屋でありたい...

和田酒造合資会社

〒999-3511 山形県西村山郡河北町谷地甲17

TEL 0237-72-3105

FAX 0237-72-3598

E-mail aratama@hinanet.ne.jp

あら玉

検索

- ・お酒は20歳になってから
- ・お酒は楽しく適量を
- ・妊娠・授乳期の飲酒は控えましょう

幹事様、同窓会事務局を
サポート致します!

同窓会++

案内状、宛名出力、出席者名簿 全てOK! お気軽にお問い合わせください
名札、会費前受付、コンビニ振込 <http://dousou.info/>

自費出版、専門書を中心とした
電子書籍販売・出版サイト!

出版費用

49,000円~

<https://bookway.jp/>



同窓会コミュニティ



同窓会での旧友との再会は今は無理!かも

ホームページでの再会ができます!

PCでもスマホでも携帯でもOK!

<https://www.bikita.jp>

お問い合わせは TEL.0120-22-5085

小野高速印刷株式会社 <http://www.ohp.co.jp>
TEL.097-556-4141

事務局だより

1. 会費納入のお願い

会費は同窓会活動の原動力です。正会員は同封の払込票にて次のいずれかの金額を納入してください。

終身会費30,000円または年会費1,500円

- ◇農工通信に払込票が同封されていない方は納入済です
- ◇過去に遡って納入の必要はありません

2. メールアドレスの新規登録、住所・勤務先等の変更届けのお願い

事務局では同窓生への各種連絡にスムーズに対応するため、メールアドレスの新規登録をお願いしています。

同窓会ホームページ [\[会員情報\(住所変更など\)\]](#) から、24時間いつでも登録、その他の変更届けができますので是非ご利用ください。従来通り、変更連絡票はがきやメール・電話など、いずれの方法でも受け付けますので住所、勤務先等の変更があった場合は、すみやかに同窓会事務局までご連絡ください。

なお、同窓会が所有している会員の個人情報の公開については、ご本人の意向に沿って管理・運営し、個人情報保護には万全を期しております。

3. 同窓会ホームページ「ギャラリー」の作品募集

写真や絵(日本画、水彩画、油絵)、版画など内容は自由です。

200字程度の紹介文を添付して同窓会までお送りください。

送っていただいた作品の中からホームページのトップ画面や農工通信の表紙も飾らせていただきます。

みなさまの力作を奮ってご送付ください。お待ちしております。



4. Facebook活用のお願い

同窓会ホームページ [\[会員交流広場\]](#) では、Facebookを利用した会員のコミュニケーションの場を提供しています。

Facebookの利用には簡単な登録が必要となりますので、詳しくは同窓会ホームページ [\[会員交流広場\]](#) をご覧ください。

また、部会・支部でFacebookページを開設された場合は、リンクを貼らせていただきますので、同窓会事務局までご連絡ください。

5. 同好部会の設置申請受付中

同窓会では、活動内容の類似した会員集団、又は同好の会員集団からなる部会一同好部会の設置ができます。設置を希望する会員は規程・細則等を参照のうえ、申請方をお願いいたします。

申請に関する規程・細則等の詳細は、同窓会ホームページ「同好部会設置申請方法」をご覧ください。



農工通信への寄稿・ご感想 お待ちしております!

- わが母校「農工大」への想いや激励はありませんか?
- 同窓同士の絆を深め、社会へのお役立ちのご提案は?
- 同好の士の交流も深めたいものです。

「農工通信」(後期号・毎年初発行)は同窓皆様の情報誌です。編集・作成も同窓生によるものです。気兼ねなく、ジャンルに捉われず、ご寄稿を期待しています。

たとえば、農工大への注文、大学時代の思い出、社会人としての経験、趣味のおもしろさ等々、同窓生交流の呼びかけも歓迎です。また、この「農工通信」は現役の学生には一つの社会人との交流の場・手段にもなります。他国立大学同窓会では、現役学生への支援に力を入れています。学生のためのご寄稿も大歓迎です。

質問・ご感想もお待ちしております。

「農工通信」編集委員会 nokotusn@cc.tuat.ac.jp

「情報提供マニュアル」のご紹介

本会が保有する会員の個人情報は名簿提供依頼書等により本会の会員に提供しております。
 なお提供された名簿は、利用目的以外に使用せず同窓会個人情報の保護に関する規則の趣旨に基づき個人情報の保護に努めていただくようお願いいたします。

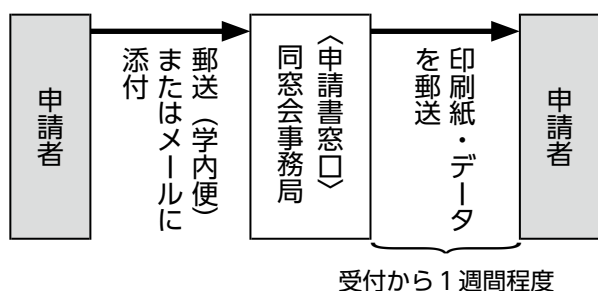
クラス会
OB会を
開こう!!

【申請手続き】

利用目的	申請者	申請書	備考
部会・支部活動	部会・支部の連絡員	(様式1)部会・支部・ クラス会等名簿提供依頼	-
クラス会・OB会等の開催	同窓会員		身分証明書(運転免許証、健康保険証など)のコピー
大学内の使用	本学および本学教職員	(様式2)卒業生・修了生 名簿提供のお願い	-
個人的な使用	同窓会員	電話依頼	-

※個人的な情報提供依頼は、ご本人の承諾を得て情報を提供します。

【申請の流れ】



【申請書の入手方法】

- (1) 同窓会事務局へ電話・FAX・はがき・メール等で、送付依頼

東京農工大学同窓会事務局
 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1
 TEL 042-364-3328
 FAX 042-335-3500
 Email info@tuat-dousoukai.jp.org

- (2) 同窓会ホームページからダウンロード

同窓会ホームページの「事務局便り・お知らせ」をクリックしていただくと、ダウンロードの方法が確認できるようになっています。

編集後記

Editor's note

皆様のご寄稿により、おかげさまで農工通信(第90号)を発行できました。

同窓会誌の寄稿による同窓会誌(農工通信後期号)はまだ新しく、度重なるご寄稿の依頼を申し上げてまいりました。ところが、後期号も4回目となると皆様に周知され、本号では作成計画を上回るご寄稿を頂戴しました。同窓会の予算上の制約もあり、誠に失礼ながら、心ならずも原稿掲載号の先送り、文字数の削減等をお願い申し上げました。ご協力ありがとうございました。

後期号では、幅広い層のご寄稿をいただき、同窓会誌の交流が広がることを期待しております。元留学生(外国在住)、現役学生の寄稿を取り上げ、同窓会誌のグローバル化の一翼をめぐし、かつ次世代同窓会を担う学生諸君の活動も紹介します。本号では、回想、仲間との交流、所論等のご寄稿を掲載しましたが、企業・団体等の業務を通じて、また農工大で学んだ知的資源を活用して、社会問題に意欲的に取り組んでおられる状況などもご紹介できました。同窓会皆様のご活躍を心強く思います。今後共、ご活躍の様子、近況、そして、農工大への激励等のご寄稿をよろしくお願いたします。私共、同窓会同好部会の農工大支援ネットワーク(AT-Netz)メンバーが農工通信(後期号)への寄稿のご依頼、編集をサポートしています。皆様には遠慮なくご意見、ご提案をお寄せいただければと存じます。

編集委員 深水智明

〈後期号編集委員〉 深水智明(織工S38)、畠山晃(林S40)、大亀哲郎(農工S46)
 峰松敏夫(農S47)、金子由実(織高S51)、荘司雅通(電情H9)

お知らせ

同窓会会則改正により、平成25年度の総会から正副会長・支部長を始め、部会・支部から推薦のあった理事や代議員のほかに、60人以内の一般の会員も構成員に加えました。

毎年1月の同窓会ホームページにて募集しますので、奮ってご応募ください。

農工通信 第90号

発行日 平成28年(2016年)1月1日
 発行所 東京農工大学同窓会
 連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局
 TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500
 e-mail info@tuat-dousoukai.jp.org
 URL http://www.tuat-dousoukai.org/
 振替口座 00120-9-93147番(加入者負担)
 加入者名 東京農工大学同窓会
 印刷所 小野高速印刷株式会社
 〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

お中元、お歳暮、贈り物に最適
 部会、支部会、同窓会でも
 ぜひご賞味下さい。



[しょうてんろく]

賞典禄

農工大ブランド本格焼酎



原酒(芋) 原酒(麦) 米焼酎 芋焼酎 麦焼酎 長期貯蔵酒(米)

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス
 教育研究センター(FSセンター)で栽培した原料(米・芋・麦)
 をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎「賞典禄(しょう
 てんろく)」を販売しています。
 ご好評いただいております「賞典禄(しょうてんろく)米・芋・麦の
 本格焼酎に加えて、芋・麦の熟成した原酒もぜひご賞味下さい。
 ろえが豊富になりました。
 この原酒は、本格焼酎の個性そのものが凝縮されている焼酎で、
 一味違う深い味わいを楽しめますので是非ご賞味下さい。

賞典禄 FAX 注文票

以下のとおり注文します。

東京農工大学 FS センター 宛 FAX : 042-367-5801

【ご注文内容】			平成	年	月	日
原酒 芋焼酎 (2,500 円) 38 度 720ml	本	米焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml				本
原酒 麦焼酎 (2,500 円) 43 度 720ml	本	芋焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml				本
長期貯蔵酒 米焼酎 (1,800 円) 41 度 720ml	本	麦焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml				本
焼酎 米・芋・麦 3 種セット (4,200 円) 25 度 720ml×3	セット	合計注文金額				円

【ご注文者様情報】						
お名前				フリガナ		
住所	〒					
電話番号				FAX 番号		
生年月日	T.S.H	年	月	日	※年齢確認をさせていただく場合がございますのでご了承願います。	

- 【ご注意】
- ※1 お支払いは代金引換またはクレジットカードになります。詳しくは下記 URL をご覧下さい。
 ただし、FAX でご注文された場合のお支払いは、代金引換のみとなりますので、ご注文者様以外への配送は致しかねます。
 - ※2 ご注文いただいた上記金額の他に、送料(5,000 円以上は無料)及び代金引換手数料(代金引換額に応じた所定の金額)が必要になりますので、
 予めご了承願います。
 - ※3 本注文票により収集された個人情報、賞典禄の販売以外の目的には使用いたしません。

ネットショップ : FS センター農工夢市場ネットショップ

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

問い合わせ先 農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務局 TEL 042-367-5811